

## アイルランド演劇を掘り起こす(3)

—ゴガティの演劇5作品

河野賢司

### (I) 著者略歴

オリヴァー・セイント・ジョン・ゴガティ<sup>1)</sup>(Oliver St John Gogarty, 1878-1957)は1878年8月17日、ヘンリーとマーガレット夫妻の長男としてダブリンのラトランド(現在のパーネル)・スクウェア5番地で生まれた。父方は3代にわたって開業医であったが、父ヘンリーがオリヴァーが幼い頃に亡くなったため、リムリック(Limerick)近くのイエズズ会のマングレット校(Mungret), その後英国のカトリック系のストーンハースト校(Stoneyhurst)へ送られた。

1896年から97年にはダブリンのクロンゴウズ・ウッド・カレッジ(Clongowes Wood College)——ジョイス(James Joyce, 1882-1941)の出身校でもある——で学び、ロイヤル・ユニヴァーシティ(the Royal University)でartsを学んだ。1879年の大学教育法で設立されたこの大学は出席の有無に関わらず試験合格者には学位を授与していたが、医学の学位だけは除外されていた<sup>2)</sup>。そこで1897年夏からは母親の勧めでトリニティ大学(TCD: Trinity College Dublin)で医学を専攻するようになる。同時に、古典語学者のマハフィ教授(Sir John Pentland Mahaffy, 1839-1919)やティレル教授(Robert Yelverton Tyrrell, 1844-1914)とも親交を結んで薫陶を得つつ、機知と話術に富む学生として評判を高めた。TCDでは英詩の副学長賞を2度受けたのち、ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)を真似て、オックスフォード大学のニューディギット賞(Newdigate Prize)を狙って1学期だけ留学するが、こちらは叶わなかった。

しかし、オックスフォードでは、ダブリン大主教も務めた詩学の権威トレンチ教授(Richard Chenevix Trench, 1807-86)の孫息子トレンチ(Richard Chenevix Samuel Trench, ?-1907)と出会い、借りていたダブリン郊外サンディコウヴ(Sandycove)のマーテロ・タワー(Martello Tower)に案内している。名前と裏腹に岩場が多いとこぼしつつ、この浜辺でゴガティは日に3, 4回も小一時間ずつ泳いで楽しんだという<sup>3)</sup>。ジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』(Ulysses, 1922)の巻頭第1挿話は、この塔に暮らす3人の男——マリガン(['Buck'] Malachi Mulligan), ヘインズ(Haines), デッドラス(Stephen Dedalus)——が描かれるが、それぞれゴガティ, トレンチ, ジョイスがモデルであるとされ、こんにちゴガティの名前はおそらくは、この「重々しくて、

肉づきのいい」(Stately, plump)〈マリガンのモデル〉としてもっとも頻繁に想起されているだろう。ちなみに、パット・マーフィ監督の映画『ノーラ・ジョイス 或る小説家の妻』(Nora, 2000)では、ノラの働く店で寝込んでいたり、夜の街をダンディに徘徊するゴガティの姿を僅かの瞬間、見る事が出来る。

1906年にゴガティはコネマラ出身の女性マーサ・デュウェイン(Martha Duane of Moyard)と結婚し、翌年にはウィーンで耳鼻咽喉科の大学院教育を受けている。帰国後、開業医として活躍し、イーリー・プレイス(Ely Place)15番地に屋敷<sup>4)</sup>を構え、ダブリンの文壇では卑猥な詩人として評判になる。作家のジョージ・ムア(George Moore, 1852-1933)は小説『湖』(The Lake, 1905, [邦訳は安達正 訳・彩流社, 2005年])のなかで主人公の司祭(その名もオリヴァー・ゴガティ神父)を「飛び跳ねる〈強弱弱格〉」(‘skipping dactyl’)と揶揄し、三部作『ようこそ、さらば』(Hail and Farewell, 1911-14)ではカーハン(Cahan)のモデルに仕立てている。

その後、ゴガティは1917年から19年にかけて劇作品3篇をアビー劇場で矢継ぎ早に発表している。発表順に3幕劇『荒廃—ダブリンの悲劇』(Blight: The Tragedy of Dublin, 1917), 1幕劇『深刻な事柄』(A Serious Thing, 1919), 同『魔法のズボン』(The Enchanted Trousers, 1919)である。とくに『荒廃』はアビー劇場でかかった芝居のなかで、ウィルソン(A. Patrick Wilson)の『泥濘』(Slough, 初演1914年11月3日)やショー(George Bernard Shaw, 1856-1900)のロンドンのスラムを舞台にした『やもめの家』(Widowers' Houses, 1892)を除けば、初めてスラム街の人々の暮らしを本格的に描いた作品として、オケイシー(Sean O'Casey, 1880-1964)のダブリン3部作<sup>5)</sup>に先んじている。また、上演記録は不詳ながら、1幕劇『不治の病人たち』(Incurables)という作品や未完の異色作『波長』(Wave Lengths)も残している。

先述した〈マリガンのモデル〉として以外にゴガティの名を広く世間に認知させている逸話は、やはりIRAによる拉致・暗殺未遂事件とリフィー川を泳いでの逃走であろう。アイルランド内戦時代、自由国支持者だったゴガティは自由国成立後、上院議員に任命されて共和派のいっそうの反感を買い、1923年1月19日の夕方7時すぎIRA 3人組に自宅から車で誘拐された。目隠しをされなかったことは解放の意図が薄かったことを物語るが、軟禁された川岸アイランドブリッジ(Islandbridge)の空家で彼はぶるぶると震えて靴音を高くあげたものだから、靴を脱がされた。そして用便を口実の隙を見て逃げ出し、凍てつくようなリフィー川に飛び込み、銃撃をかいくぐって脱走に成功したという。当時44歳の壮健な体力もさることながら、あらかじめ重い靴を脱いでおいたことが水泳に功を奏したのは言うまでもない。彼はリフィー川への感謝の気持ちから2羽の白鳥をリフィー川に放ち、最初の詩集のタイトルも『白鳥の贈り物』(An

*Offering of Swans*, 1923)であった。クアラ・プレスから刊行され、翌年追補されてロンドンでも刊行されたこの詩集には、愛を歌う伝統的抒情詩や美のはかなさ、死に直面しての勇気の必要性を歌う詩などが収められている。序文を寄せたイエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) は、「ときおり不用意な詩行」はあるものの、寛大な賛辞を綴っている。

続く『野の林檎』 (*Wild Apples*, 1928) のなかの詩は、イエイツの編纂した『オクスフォード現代詩集』 (*The Oxford Book of Modern Verse*, 1936) に転載された。上院議員時代 (1922-26) のゴガティは舌鋒鋭くデ・ヴァレラ (Eamon De Valera, 1882-1975) 批判を展開し、暗殺未遂事件のちょうど1か月後の1923年2月19日にはコネマラの屋敷「レンヴィル」 ('Renvyle') をIRAに焼き討ちされる目に会うが、ホテルとして再建している。これ以後、彼は拳銃を携帯し、護衛をつけることになる。1937年、自伝『サックヴィル通りを歩いていると』 (*When I Was Going Down Sackville Street*) が名誉毀損で訴えられ敗訴するとアイルランドに対する幻滅を深め、ロンドンへ移住、その後アメリカへ移住し、還暦でもあることから医業を諦めて自伝の続き『聖パトリックに従う』 (*I Follow St Patrick*, 1938) や『まったく時節はずれ』 (*It Isn't This Time of Year at All!*, 1954) などを執筆、ロンドンのウェスト・エンドにあるホレス通り病院 (Holles Street Hospital) の一夜を描いた喜劇小説『藁の中を転げまわって』 (*Tumbling in the Hay*, 1939) を1939年に発表、これはジョイスの『ユリシーズ』の14挿話「太陽神の牛」に類似している。ニュー・ヨークでは英国カントリー・ハウスを舞台にしたバーレスク小説『ネイティヴになって』 (*Going Native*, 1940)、1798年の反乱の時期に設定された長編ロマンス『途方もない壮麗さ』 (*Mad Grandeur*, 1941)、『ペチュニア氏』 (*Mr. Petunia*, 1945) を発表している。未刊の詩も集めて『全詩集』 (*Collected Poems*) が1951年に刊行され、古典に触発された優雅な詩から屈託のない卑猥な詩にいたるまでゴガティの面目躍如である。彼自身の自伝的回想は生き生きとしているが、眉唾な箇所もあるという。1957年9月22日、ニュー・ヨーク市で心臓発作のため逝去する。享年79歳。

このように、開業医にして上院議員、詩人、小説家にして劇作家というきわめて多芸多才、八面六臂の活躍をしたゴガティであるが、拙論では彼の劇作家としての側面に焦点を絞り、以下に作品に即して考察していきたい。

## (II) 劇作品5編の梗概と解題

①『荒廃—ダブリンの悲劇』 (*Blight: The Tragedy of Dublin*, 1917年12月11日、アビー劇場にて初演) 演出はフレッド・オドノヴァンで、主役タリーも務めた。この作

品はゴガティとジャーナリスト（のちに判事）のオコナー（Joseph O'Connor）の共同執筆とされるが、『イヴニング・メール』紙に連載していたオコナーのスラム関連記事からゴガティが着想を得て、台詞の一部手直しを手伝ってもらった程度で、実際の執筆はゴガティがほぼ全面的に担ったと解してよいという<sup>6)</sup>。なお、初演当時は「アルファとオメガ」（Alpha and Omega）なる別の名前で発表された<sup>7)</sup>。また、当時18歳の若きマクチャーモ（Micheal Mac Liammoir, 1899-1987）が、ジミー役で好演したという。

のちに見るように、公演は早期打ち切りの噂もあって大入り満員の観客が詰めかけたが、グレゴリー夫人（Lady Augusta Gregory, 1852-1932）は政治的外圧への配慮もあってか、僅か10日でこの芝居を千秋楽とさせた。160ポンドという未曾有の興行収入をあげたにも関わらず、グレゴリー夫人から劇作家に支払われた脚本料は2ポンド10シリング（売上の1.5%）。彼はその小切手を即座に慈善団体に寄付し、寄付者と金額をその団体が公表していたため、夫人の吝嗇ぶりを世に知らしめて一矢報いたのだという。

**第1幕** ダブリンの安アパートの一室。寝台が3箇所に入れられ、洗濯紐で吊るしたキルトが目隠し代わりに使われる。

下手の寝台に寝そべる中年男スタニスロース・タリー（Stanislaus Tully）は、上手の寝台に寝そべる妹メアリー・フォウリー（Mrs Mary Foley）に声をかけ、酒を買いにやらせた甥（メアリーの息子）ジミー（Jimmy）の帰りが遅いのに苛立つ。タリーは3週間前、クレーンで吊り上げた積荷（セメント袋）が背中に落下する労働災害に遭い、負傷している。（当人は、「生涯にわたる障害」（a cripple for life [512]）と主張するが、その後の展開から判断して、さほどの重傷ではないようだ。「仮病患者」（malingerer）と断定する説<sup>8)</sup>もある。）しかし、裁判で補償金が認定されれば、このアパートを買い上げ、近々実施される町議会議員（Town Councillor）選挙に出馬しようと計画している。

パブから黒ビールを買って、足の不自由なジミーが戻る。洗い物用水差し（washing-jug）に入った黒ビールをタリーが洗面台でグラスにすくっていると、分教区世話人（district visitor）のマクスウェル＝ノックス嬢（Miss Maxwell-Knox）が来訪。慌ててビールにジャム瓶をかぶせ、「神の王国はあなたたちの中にあり」と書いたカードを表返す。神の思し召しやご加護を説く彼女に、一部屋に8人住まいの暮らし（身重のメアリーには6人の子どもがいる）で、出征軍人の妻に支給される「別居手当」（Separation Allowance）だけでは生活は不十分だとタリーは反論する。彼女は、逆境は不屈の精神を養う絶好の機会なのに、不衛生な暮らしに墮している、としてジミー少年の汚れた顔を洗ってやろうと水差しに手を入れ、中身が黒ビールだと気づく。禁酒の誓いを破り、渡した食費を酒代に回したことで地団太を踏んで怒り出すマクスウェル＝ノックス嬢。これに対してタリーは長広舌をぶって反駁する——大家族が狭い一間で暮す状況ではおちおち熟睡もできない、酒は麻酔薬（クロロフォルム）より安い睡眠薬であり、酒の欠点は、自己満足を得るために彼女のような分教

区世話人が押しかけることで、諸悪の根本原因は貧困であり、そこから不潔や病気、不平が生まれる、酒を飲むから貧乏になるのではなく、貧乏だから飲まずにいられないのだ、市内の教会や公園が建築・修復されたのは(醸造会社が寄付をしたからであり)酒のお陰でもあるのだ、と。タリーの不謹慎な饒舌を咎め、詫びをいれるメアリーに、酒は貧乏人の自分にとって朝食でもあり安らぎでもある、とタリーは譲らない。

メアリーの娘リリー(Lily)が登場。口笛を吹いて化粧する様子に、マクスウェル＝ノックス嬢は「罪の報いは死なり」(ローマ6章23節)を繰り返す。リリーは洗濯屋勤務をやめて実入りのいいレストランで働いているらしいが、売春行為も示唆される。貧困は無実であり誰の責任でもないが、(売春の)罪を犯しながら平然としているのは大罪であると、マクスウェル＝ノックス嬢はリリーを非難する。

このアパートに住む隣人のラリーシー夫人(Mrs Larissey)が登場。家主のパナーマン氏(Mr Bannermann)が退去通告書(Notice to Quit)を持って家賃の請求に来ることを知らせる。夫人は自分が身を持ってメアリーたちを立ち退きから守ると言う。家主のパナーマン氏が来訪。週4シリング6ペンスの家賃の支払いは困難だと夫人は弁護するが、家主は退去通告書をドアにピンで留め、今週末までに支払うように命じる。リリーは出勤する。マクスウェル＝ノックス嬢も匙を投げて退却する。タリーは町議会選挙出馬の意向を語るが、家主は相手にしない。男(ジャーヴィ)とその相棒が登場。身体不自由なタリーを介護して裁判所まで連れて行く係りである。事故当時の服装で、松葉杖をつき、階段では「皇帝を運んでいるんだぞ」と叫ぶタリー。(幕)

**第2幕** (第1幕と同じ場面で、しばらく後)メアリーを担当の医学生ディックが往診に訪れる。出産はまだ一両日先と思われるが、メアリーは彼が出産に立ち会ってくれることを望む。しかし、彼は試験を受けるために別の患者を診察する必要と、学費の埋め合わせに叔父と競馬に行く予定がある、と伝え、懇意の看護婦を代理に派遣するし、受付係りに連絡先は知らせると答える。ジミーが、タリーが辻馬車の御者台に乗って、大勢の群集を引き連れて帰宅の途にあることを知らせる。メアリーは興奮して動悸が激しくなり、気絶する。二人の男に抱えられてタリーが帰宅。意識を取り戻した妹に、雇用者責任で300ポンドの補償金を得た経緯を説明する。事務弁護士との打ち合わせで、両足は麻痺状態で痛覚さえないことにし、急性灰白髄炎(いわゆる小児麻痺)が原因だとか、脊椎破裂だとか主張する外科医もいたが、裁判官は業務上の事故である以上、最大限の補償額を認めると判断してくれたのだという。

大家のパナーマンが朗報を聞きつけて登場。タリーは家賃を支払う前提条件として、床や階段の補強、水道蛇口の設置、47人未満の住人に水洗トイレ1件の設置、台所の殺菌、窓ガラスの修復等を要求し、聞き入れられなければ、家賃不払い運動をアパート入居者全員で行なうことを宣言する。そして、このアパートの建設費に320ポンドかかったことを大家から聞き出し、なんなら自分に売却しないかと持ちかける。アパート経営はすでに6年も過ぎており、タリーは2棟で100ポンドの買収金を提示、大家は即金でなら応じると回答。さらに10ないし20ポンド上積みすることで、交渉はまとまる。アパート購入に大金を投資することをメアリーが訝ると、将来、道路建設などで地価は金鉱並みの価値があるとタリーは答える。

通りから演説を要望する人々の声に応じて、窓から演説を行なう。劣悪な住環境(ダブリンでは毎日、赤ん坊が4、5人死亡している)から労働者が解放されるためには、労働者の強い団結が必要であり、人々の利益

を尊重し信頼のおける人物をこの地区から代表者として選出すべきであり、仮に自分が選ばれば、このアパートの賃貸料の延納分は帳消しにする。アイルランドの首都ダブリンに、外国勢力はもちろん地元の勢力は一掃する。貧困は罪ではないが、貧困を招いたのはアイルランドを連合法で支配した英国の責任であり、地方自治体としてのダブリンがスラム解消に取り組み、自分もまたダブリンのために尽力する、という趣旨の立候補宣言であった。英国非難の一節をメアリーが誉めると、タリーは、政治の要諦は、身近な英雄と遠く離れた悪党を人々に提示することだ、と醒めた発言をするのでメアリーは失望する。

ラリシー夫人と御者の夫、労働者が少し酔って登場。タリーの名演説を誉める彼らに、タリーは馬車代やご祝儀を与える。医学生ディックは、事態が改善したのだから殺菌洗浄液用に別の水差しと洗面台を備え付けるように忠告する。なくても構わないとは言いながら、選挙対策には有効だと判断し、タリーは賛成する。治療入院を嫌がるジミーに、天使が赤ちゃんを連れてきたときにジミーが家にいたら天使がびっくりするでしょう、とラリシー夫人がとりなすと、この通りでは天使はそんなことには慣れっこのはずだけど、とジミー。(幕)

**第3幕** タウンゼンド・サナトリオン(Townsend Thanatorion)病院の会議室。医学生ディックとデイヴィ(Davy)<sup>9)</sup>が椅子に脚を投げ出して一服しながら談話中。唇のただれで性病の感染症と疑われる若い患者が昨日来訪し、それがメアリーの娘リリーであると知って驚くディック。リリーは性病専門のロック病院(the Locke)へと送致された。梅毒のワッセルマン反応試験のように単純な血液検査で感染予防ができるのに、実行されていないのは、治療に勝る予防効果の認識不足と医学に倫理を持ち込む偽善的態度のせいだと彼は主張する。

掃除婦に任命されたラリシー夫人がバケツ、雑巾を持って登場。煙草の煙を換気し、会議があることを伝える。週に1日だけ勤務の好条件をディックは冷やかす。この病院の理事だったマクナブ(Mr William Mac-Nab)が死去し、その財産3万ポンドの用途をめぐる議論が会議で交わされるらしい、と夫人は教える。デイヴィはマクワーター(McWhirter)理事が病院の全面配管工事に使うだろうと推測するが、タウンズリー(Tisdall Townsley)理事がレンブラントの「解剖学実習」などの名画数点の購入に使うだろうとディックは予想する。夫人は、小児病棟の子どもたちに新鮮な空気に吸わせる方が病棟建設よりも役立つ、と批判、医学生たちは戯れ歌を歌いながら退場。

理事たちが入室。まずギャルブレイス(Mr Norris Galbraith)、続いてタウンズリーが入室。〈3番目の入室者が議長役を務める〉というおかしな慣例があり、2人が次の入室者が誰になるかと気にすると、掃除婦のラリシー夫人がバケツを取りに戻ってくる。実際に3番目に登場した理事は、陽気な肥満体のモーフィー(Mr Morphy)で、4番目にタリーが入ってくる(彼はどうやら選挙に当選し、この病院の理事にも就任したらしい。)壁の絵画を眺めていたギャルブレイスはタウンズリーに勿体をつけて講釈を垂れる。5番目にマクワーターが到着して定足数に達したので、議長のモーフィーが前回会議の議事録朗読をマクワーターに要請する。他界した同僚マクナブの親戚に寄せる追悼決議を会議冒頭に行なうことをマクワーターは主張するが、他の全員によって却下され、議事録朗読が始まる。小児病棟へのカナリアの寄付や、日用雑貨・食品の寄付者の氏名と物件の朗読、クリスマス会主催の婦長への謝辞、看護実習生への講話、看護婦ダンス・パーティでの停電

原因と関係学生の訓告処分などが読み上げられ、全会一致で承認される。(もっとも、モーフィーの会議での発言が「陳腐な発言」[trite remarks]であったとか、まだ存命だったマクナブに「故人」[the late lamented]の表現が早くも使われている点などで異議の声が上がるが。)ギャルブレイスは、署名用にマクワーターが提供した米国製万年筆を俗悪だとこき下ろし、驚ペンを要望する。

次に、伝染病予防計画策定を通達する公文書への病院としての対応について協議され、ようやく故マクナブ氏への追悼文が議長によって朗読される。

朗読中に遅れて到着したチュマルティ(Mr Tumulty)は、戸口付近の席に離れて座る。議長はシェイクスピアを引用しつつ故人を称揚し、顕彰施設の建設を示唆する。ギャルブレイスはこれを支持し、寄付金3万ポンドを運用してローマ・カトリック、プロテスタント両派共同の埋葬施設(mortuary chapel)の建設を提案する。タウンズリーは、看護婦寮に隣接する住宅2棟の買収と東屋建設を提案するとともに、看護婦寮の改善とカトリック、プロテスタント別々の埋葬施設を主張、さらにマクワーターは、どちらにも属さない非国教徒(クエイカー教徒など)のために、第3の埋葬施設の建設を強硬に訴える。議長は、折衷案として、三位一体を表すシャムロックのような3分割の建造物を提案する。3人とタリーはこれに賛同するが、チュマルティは異議を唱え、小児病棟の瀕死のわが子に面会が許されなかった退役軍人を会議に呼びたいと提案する。ここは慈善施設であり、長年慣行の(面会拒絶の)規則を遵守すべきだと説く議長に、病床1床のコストの半額で、アパート1棟の買収と解体費用が賄える、疫病流行地の一掃に2万ポンド使えば、この病院の1病棟が閉鎖できるのであり、なにも病院や図書館建設ばかりが福祉ではない、提案された埋葬施設は制度全体の非能率と愚鈍の象徴である、と反論する。

退役軍人ジョージ・フォウリー(George Foley)が平服姿で登場。第1次世界大戦の戦地から昨夜帰還したばかりの彼は、義理の兄であるタリーが100ポンドで買収したアパート2棟を、公衆衛生委員の権限を利用して2,000ポンドで転売しようとしているのを聞いて憤慨する。さらにタリーが、ジョージの第2子(新生児)の死は赤痢によるものであり、道路清掃は清掃局の所管である以上、自分に責任はない、と居直るのに対し、神の呪いあれ、と激昂して退出する。

チュマルティは、慈善活動から実際に恩恵を受けているのは慈善を施す側だと、タリーの不明朗な転売を批判するが、タリーは土地や財産の所有は正当な営みだと反論、ギャルブレイスも病人救済を目的とする病院施設拡張であると、これを支持する。チュマルティは、慈善的形式主義が事態を悪化させており、病気の治療よりも予防、警察よりも教育に投資しない限り、この荒廃した街の子どもたちはモレク<sup>10)</sup>のような政府の犠牲になる、と訴えて去る。

残された5人の理事は彼を「組織の分からぬ怠惰な夢想家」「運営責任欠如」などこきおろし、逆に彼の理不尽な非難によく耐えたということでタリーを賞賛する決議案を全会一致で採択し、タリーと握手を交わす。(幕)

1913年、ゴガティは医学協会(Academy of Medicine)で『ダブリン市の学童の検診

について』(‘On the Inspection of Dublin school children’)と題する講演を行なっている。この講演記事は翌日の『アイリッシュ・タイムズ』で報道され、当時ダブリンの社会問題に従事していたモード・ゴン(Maud Gonne, 1866-1953)から、激賞の便りを受け取っている。『荒廃』は、一部の専門家にしか読まれない医学論文としてでなく、一般市民にも近づきやすい演劇の形でスラムの惨状を訴える狙いが込められている。とくに最初の2幕では、狭い一間に妊婦や身障者、赤ん坊を含む8人家族がひしめき合っ暮らし、部屋にはトイレもなく、バケツの汚物を捨てに3階から戸外へ降りて行かねばならないという、ダブリンの貧民窟の悲惨な状況が描かれている。

第3幕に入ると一転して、反目する病院役員理事たちの滑稽な理事会の様子が展開される。役員理事のうち、ギャルブレイスはジョージ・ムア、タウンズリーをソーナリー・ストウカー(Sir Thornly Stoker), チュマルティをゴガティ自身のモデルと指摘する論評もある<sup>11)</sup>。この場面ではいささか影が薄くはなるが、病院理事を兼ねる議員に成り上がったタリーの、世渡りのあくどい手口が浮き彫りにされる。スラムからの脱出を遂げた彼は、他ならぬそのスラムの不動産転売でさらに利益をあげていくのである。タリーにはもと自分が属していたスラムに対する同情の念がまったく窺えない。彼の妹メアリーが、その後いったい、どうなったのかも判らない。帰還した夫が彼女の姿を捜し出せないでいるという事実は、彼女や子どもたちがアパートにはいないことを意味する。おそらく転売のために、入居者は全員強制退去させられたのだろうと推測される。メアリーはいま別の住居で無事に暮らしているのか、性病患者の娘リリーと同様に入院中なのか、あるいは伝染病などで亡くなったのか、ゴガティは教えてはくれない。

さて、前述の〈スラム転売〉の主題は、マクナルティ(Edward McNulty, 1856-1943)の『市長』(*The Lord Mayor*, 1914)でも扱われていたことが思い起こされる。他にも、『市長』の影響を強く感じさせるのは、タリーの窓辺での政治演説、陽気で風刺的発言をする掃除婦ラリシー夫人の存在などが挙げられる。

一方で、『荒廃』はのちのオケイシーのスラム劇『ジュノーと孔雀』(*Juno and the Paycock*, 1924)に大きな影響を与えている。登場人物の設定では、仮病を使い酒好きなタリーはボイル〈船長〉、あるいは悪巧みで他人の弱みに付けこむ点ではジョクサーに、懸命に働く母親メアリーはジュノーに、肢体不自由の息子ジミーはジョニーに、性的に墮落するリリーはメアリーに、それぞれ非常に類似している印象を受ける。冒頭の寝台のシーンは、オケイシーのダブリン3部作の第1作『狙撃兵の影』(*The Shadow of a Gunman*, 1923)の幕開きと共通である。

『荒廃』の初演を観劇した希代きたいの見巧者みごうしゃホロウェイによれば<sup>12)</sup>、「誰から聞いても、話



題や論争を引き起こしそうな芝居」で、とにかく「すごい代物」だから初演一回きりで上演禁止になるのではとの前評判が事前に広まり、劇場ロビーには有名人（ジョージ・ラッセル、グレゴリー夫人、ジェイムズ・スティーヴンズ夫妻、シェイマス・オサリヴァンなど）の姿が見られ、近年まれにみるほどの観客がアビー劇場に詰めかけたという。内容に関しては、「ダブリンの街の核心に喰いこむ問題を誠実に論じ、ある程度の露骨なりアリズムで扱った点で、ダブリン市民にはかなり興味深いものだったが、スラムの害悪は慈善や病院の拡張によっては決して食い止めることはできず、その根本においてしか抑制できない、という教訓を痛感させた。スラムを生み出す害悪を食い止めよ、そうすればスラムやスラムが生む諸悪も消え去る。」——こうした教訓をホロウェイはこの芝居から感じたという。

また、彼の友人コンロイはこの『荒廃』を、「登場人物たちの」「様々な解釈の討論」と評し、ホロウェイ自身も「芝居というよりも討論」であり、「登場人物は会話ではなく議論をしていた」と総評している。

『アイリッシュ・タイムズ』紙は「真実の剥き出しの光のなかにスラム街の恐怖を暴き出した」と評価し、『アイリッシュ・インデペンデント』は、「『荒廃』はダブリンの悲劇であり、アイルランドの首都のスラム街に憑いた、おぞましくも恐ろしい、しのびよる亡霊である。この芝居は、恐怖のための恐怖ではない。(中略)この不気味な絵画の画家たちの意図を私がちゃんと理解しているとすれば、こうである。スラム街は悪の温床であり、緩和剤としての慈善はまったく救済になっていない。病院に寄付金を与え、そうした施設が敷地を拡大し、増加した患者の要求を満たすように援助する慈善事業は、実際には、指示を間違えた慈善事業である。病巣は絶たねばならないのだ！」<sup>13)</sup>と力説している。

同時代の演劇批評家マローン(Andrew E. Malone, 1888-1939)は、以下のように述べている。——「この作品もまた、ダブリンの労働者が生活せざるを得ない不潔な状況を描いている。だが、それはこうした状況の責任をすべて雇用者の側に押し付けようとはしていない。実際、『荒廃』は雇用者同様労働者をも厳しく批判しており、それ故プロパガンダの意図はまったくないものである。それは、(中略)作者の客観的な観察であって、救済の方法を描くよりはむしろ観客に対して問題提起を行っているのである。この作品は、ダブリンの社会的状況に対する批判的で皮肉な洞察と、著者の特色のある鋭い心理学的描写によって深い印象を与える。それは再演に耐える芝居であるし、(中略)『荒廃』は、疑いなく、アイルランドの社会問題を[個別的に]扱ったアイルランド人の劇作家による最高の作品である。」<sup>14)</sup> ([ ]内は引用者による補足)

総じて、芝居に託されたメッセージは好感をもって受け止められたことがわかるが、

劇作術上の欠点としては、最初の2幕と第3幕で場面や趣きが大きく異なること、とりわけ、主役と思われたタリーが第3幕でいきよに生彩を失い、第3幕後半になってようやく登場する（テキストで言えば34頁の作品の26頁目で初登場し、29頁目で初めて喋り出す）チュマルティが、作者の代弁者のような大演説をぶつ点が、構成の偏りの欠陥として挙げられるだろう。

## ②『深刻な事柄』(A Serious Thing, 1919年8月19日, アビー劇場にて初演)

初演では、著者ギディオ・ウズリー(Gideon Ousley)という筆名で発表された。この名前はのちに、小説『藁の中を転げまわって』や『ネイティヴになって』でも使用される。演出はレノックス・ロビンソン(Lennox Robinson, 1886-1958)。著者注記として、ローマ兵たちの制服は、「有名で広く配分されている」ので「カーキ色(黄土色)」が望ましいとしているのは、独立戦争の悪名高い英国軍〈ブラック・アンド・タンズ〉の軍服の色調を風刺したものと思われる。「劇場を絶えず哄笑の渦に巻き込んだ」(『フリーマンズ・ジャーナル』8月20日)一方、「巧妙な風刺」(『アイリッシュ・タイムズ』)が仕込まれている。

時はローマ建設<sup>15)</sup>後785年、すなわちA.D.32年ごろで、ローマ帝国初代皇帝のアウグストゥス時代(27B.C.-A.D.14)が過ぎたころ、場所はベタニヤのラザロ<sup>16)</sup>(Lazarus)の墓。

軍歴20年目を迎える第1のローマ兵士が新聞を取り出し、「(キリストを処刑した)ピラト総督の妻が夢を見た」という記事を読む。若い百卒長(Centurion; 百人隊[Century]の隊長)が登場し、不法集会やアジ演説の取締りを指示し、いったん帰りかけて慌てて引き返し、警護の相方の所在を尋ねる。オバデヤ(Obadiah, ヘブライの預言者名・旧約聖書の一書と同名)という名でユダヤ人の第2のローマ兵士の到着が遅いのには百卒長は立腹する。ようやく、オバデヤが駆けつけ、兵舎が千歩以上離れている遠方だからと弁解する。同様の指示を彼にも与える百卒長に、アジ演説かどうかはどう見分けるのか、と彼は尋ねるが、防疫線(cordon sanitaire)の任務を果たせ、と言って百卒長は立ち去る。オバデヤは第1の兵士に、演説が最初から煽情的とは限らないし、言論の自由を弾圧して演説を禁じるわけにもいかない、と答える。歌にもあるように、〈ゴールを征服したシーザーだって少年に征服された〉のだから、若輩の百卒長に横柄に指図されるのも止むを得ない、といたって暢気である。敬礼に際して右手を額まで挙げる代わりに、臍以下の高さにするように軍規則が改定されたこと、それは常勝の行軍の敬礼を受けたティベリウス帝(Tiberius, 42B.C.-A.D. 37)が臍を捻挫してしまい、臍までしか手が挙がらなくなったためである、と第1の兵士はオバデヤに伝える。なんのために墓を警備しているのか、我々兵士がいるから民衆が煽動的になるので、占領国はことごとく反抗者ばかりだ、とオバデヤが言うと、第1の兵士は2つの勲章のリボンを示して、自分の武勲を誇る。負けじとヘルメットをはずし、頭に負った名誉の傷を見せるオバデヤを、第1の兵士は、お前は訓練も勇気も自制心もない

奴だと馬鹿にし、シーザーの演説を引用する。――煽動は公会堂から、腐敗はマールスの野から、不和は上院議事堂から駆逐され、正義や平等、勤勉が回復した。為政者たちは権限を取り戻し、勧善懲悪の気風で上下それぞれ分限を弁えている。これもピラト総督と内助の功に努めたクローディアのお陰である、といった内容である。

背後で暴徒たちの声が聞こえ、2人の兵士は塀の外を眺める。軍列をなさず、また墓を目指さない行進だったので第1の兵士は安心し、オバデヤに再び名演説の一節を引用して聞かせるが、この騒動の張本人の小柄な黒い男が一人でこちらに向かってくる、とオバデヤは脅えて伝える。しかし男が丸腰と分かり、2人の兵士は安堵する。

突然「ラザロ！」と大声で呼ぶ声がし、第1の兵士が跳び起きて声の方へライフル（または槍）を構えた瞬間、背後の墓石が開き、壁石がオバデヤに崩れ落ちる。「出て来るがよい！」の声に、墓からラザロの遺体が立ち上がり夢遊病者のように出てくる。第1の兵士は遺体に対して停止と許可書の提出を求め、オバデヤは怖くて彼の足にしがみつくと。甦ったラザロはいなくなる。

第1の兵士は、ラザロと分かったから軍法会議にかけるぞ、と意気軒昂だが、オバデヤは3日前に死んだ人間が生き返ったことに動転し、武器を投げ出す。第1の兵士は、もし死者の復活現象が蔓延するなら、軍役も勇気も無益であり、自分は軍に辞表を提出する、どえらく〈深刻な事柄〉だからこの件をピラト総督に報告する、と言うが、オバデヤは死がなくなったことを賞賛し、喜ぶ。

騒ぎを聞きつけた百卒長が登場。死者ラザロの復活の経緯を第1の兵士は冷静に説明する。当惑した百卒長は、潜在意識や日射病、心理協会、女性たちなどが幻覚の原因ではないかと第1の兵士に問いたすが、いずれも彼は否定する。どうせ、政府よりも降霊術に関心のある人々の仕業だろうから、総督に知らせる事柄ではない、と百卒長は判断するが、〈死がなくなれば名誉もなくなり、自分が得た勲章の価値も失墜し、戦争もなくなってしまう、なぜなら、死後も残業や戦をしたがる者はいないし、ユダヤ人が常備軍を持てば作戦行動にきりはないし、死者ゼロでは遺産相続もできないし、武勲もたてられないからだ〉、と第1の兵士。再び歓声と「ああ、わが無傷のラザロ！」の叫び声。ここに至って事態の深刻さを認識した百卒長は、総督への報告を決心する。オバデヤは、死にたくない、と逃亡する。百卒長は、死の束縛が生に品位や威厳を与える、と語り、ピラト夫人クローディアスには慎重さが欠けていた、として、法の厳格な執行、死と私有財産の保護、国家の知的財産や道德教育の自由な発展が必要であり、降霊術の出る幕ではない、として総督のもとへ急ぐ。

(幕)

この芝居は形式的には歴史劇・宗教劇であり、ラザロの復活によって初期キリスト教徒たちがローマ帝国の支配体制を脅かし始める事件を扱っている。しかし、のちに詳しく触れるように、1919年は独立戦争のさなかであり、ローマ人兵士に代表されるローマ帝国は大英帝国（厳密には第1の兵士が英国の体制を、ユダヤ人徴兵である第2の兵士は英国の体制外の人々）を、ラザロ（や彼に従うガリラヤの民）はアイルラ

ンド人を象徴し、救世主キリストによるアイルランド独立・解放を願う意図が込められているのは確かである。

救世主願望劇は、グレゴリー夫人の『解放者』(*The Deliverer*, 1911)やレノックス・ロビンソンの『失われた指導者』(*The Lost Leader*, 1918)などの先行作品があり、この主題は1910年代のアビー劇場の観客ならば、明瞭に悟ることができたはずである。

イエイツはこの作品を気に入り、のちに同じ主題でキリストの復活を描く1幕劇『復活』(*The Resurrection*, 1931)を書くことになる。作中で登場するピラト総督夫妻が心理協会に関心を寄せている趣旨の台詞は、当時、降霊術に傾倒していたイエイツ夫妻を当てこすったものであろう。自動筆記の霊力をもつ26歳の女性Georgie Hyde Leeとイエイツが結婚したのは1917年10月20日、この芝居の2年ほど前のことだった。

### ③『魔法のズボン』(*The Enchanted Trousers*, 1919年11月25日、アビー劇場にて初演)

前作と同様に、初演は著者ウーズリー(Gideon Ousley)なる筆名で発表された。

場面は、アイルランド西部のクレア＝ゴールウェイ州の国民学校の教室。黒板の半分に音階表<sup>17)</sup>(map of Tonic Solfa)が吊るされ、壁面には「大陸は外国人が住む国である」「島は海軍に囲まれた土地である」といった奇妙な標語<sup>18)</sup>の紙が貼られている。

ハンフリー・ヒーヴィー(Humphrey Heavey)は、俳優であるが定職に就いていない。出演予定の芝居の登場人物であるデュ・ヴァン・デジール公爵(Duke Du Vain Desir<sup>19)</sup>)の稽古中である。「畜生」と悪態をつく台詞と暖炉に唾を吐く動作のどちらを先にすれば効果的だろうかと思案しながら、練習している。入ってきた母親ヒーヴィー夫人(Mrs. Heavey)は、不潔だから唾を吐かないように注意し、英国で俳優稼業に挫折して帰ってきた息子に、この学校の教師をしているもう一人の息子アンディ(Andy)を見習い、まっとうな職につくように説教するが、ハンフリーには馬耳東風である。

アンディが登場し、人事委員会直属の視察委員会の面々がまもなく到着するから受け入れ準備をするように伝える。委員会はじゃが芋の胴枯れ病を予防する農薬を噴霧器で撒布する係官<sup>20)</sup>を任命するためにこの地を訪れるのだが、年収1,200ポンド<sup>21)</sup>の高級官職(高給閑職?)であると知って夫人は驚くと同時に、高等教育を受けたアンディこそその職に相応しいと考えるが、公職は基本的にイングランド人(もしくはスコットランド人)しか採用されない。しかし、アンディは俳優であるハンフリーがイングランド人の演技をしてなりすませば就職は可能であると指摘し、薬学の専門知識がないと難色を示すハンフリーに対して、英国は現地語の予備知識などないままインドやエジプトで植民地政策を強行してきた、と反論し、まずはイングランド人らしい響きの偽名を考案しようと、「スロウ」(Mr Slow)を提案するが、ハンフリーは自分の芸名「ジークフリート・ストット」(Siegfreid Stott)<sup>22)</sup>の使用を主張し、受け入れられる。次にアイルランドの片田舎にイングランド

人がいる口実として、狩猟に来たが収穫なしに終わったのだ、と決め、衣装として必要なノーフォーク・ジャケット<sup>23)</sup>、ニッカボッカーズ(半ズボン)、スパッツ(脚半)は、[1911年4月の] 英国王 [George V] のアイルランド訪問時の〈私服警官用の私服〉が警察署に6着あるから、と夫人は取りに行く。委員たちとの面談になお躊躇するハンフリーに、音階表をこっそり棒で指すから子音を無視して母音だけを発音すれば返事として十分である、と提案し、練習をしてみせる。すなわち、「ド」を指せば「オ(ウ)」、「レ」を指せば「エイ」、「ファ」を指せば「ア(ー)」と、感嘆の相槌を打てば良いのである<sup>24)</sup>。

夫人が巡査部長の妻から衣装を借りて戻る。委員たちを車で案内してきたお抱え運転手の話では、年度末を間近に控え、人件費予算に剰余金が発生しており、早く消化しないと来年度予算で削減され、さらには責任問題が浮上して減給処分もありえる、というので委員会は慌てているのだという。アンディはシェイクスピアの『リチャード2世』の英国賛歌の一節<sup>25)</sup>を引用して、このズボンを穿くことで心身ともにイングランド人に変身するのだと、ハンフリーをけしかける。寸法の小さい妹の靴もお膳立てし、ゴルフ・クラブやボール(あるいはティー)代わりに角砂糖の小道具も用意する。衝立の裏で着替えを終えたハンフリーはそれまでの軟弱な態度から一変して、すっかりイングランド人の役作りが出来上がっている。

いよいよ4人の委員たち(および『肥料の賢明な使用法』『平和序論』の著書のある有識者のパイル氏 [Mr Pile])の登場。しかし、彼らはゴルフのスウィング練習をするハンフリーの「フォア」(ボールがそっちへ飛ぶから危ないぞ、の意)の大声にすっかり面食らったの登場となる。部外者と思しきハンフリーの存在に、彼らは地図で付近には救貧院<sup>26)</sup>と刑務所しかなく、ここが目的地の学校であることを確認する。(救貧院は老人で溢れ、一方の刑務所は閑古鳥。この村は犯罪ゼロを誇る平和な村である。)ハンフリーは彼らを無視してゴルフの練習を続ける。委員の一人が、撒布官志願者が誰もいないのを不審がると、秘書役の委員が、国会議員からの斡旋依頼に対応するために、選出後に公示する(いわゆる「出来レース」にする)裁量があると判断したので、今回は事前公募がなされていない、と明かす。遅れてもう一人の委員アーサーが到着。ハンフリーを採用合格の候補だと早合点して祝意を述べるが、そうではなく、なにかの手違いで彼が学校を狩猟小屋として借り受けておりこのまま居続けるらしいことを知る。アーサーは秘書役委員と協議のうえ、他に応募者がない以上、このハンフリーを撒布官に任命することに決め、巧みな話術で打診をはかる。ハンフリーは気分転換と休養のためにここに来たのだ、とひとまず難色を示してみせるが、単なる行政職で肉体労働は伴わないとの説明を受け、承諾の意思を示す。年収1,000ポンドの予想通りの条件提示に対し、ハンフリーは大胆にも増額を要求し、委員たちは協議の末、地理的条件から男女各1・計2名の常勤助手を必要経費と認定し、倍額の2,000ポンドを提示し、ハンフリーは快諾する。今後の連絡先住所の問い合わせには、ダブリンの文藝クラブを挙げ、会食の誘いは丁重に辞退する。委員たちは全員退出する。

万事思惑通りに事は運び、夫人は2名の常勤助手に自分とアンディを採用することを提案する。しかし、ハンフリーは身内の者を縁故採用するのは行政の腐敗であり、アイルランド人の国民的欠陥である、として提案を拒否し、分別や知性よりも自分は清廉潔白を選ぶ、と言って立ち去る。アンディは彼が今度戻って来たら顔をぶんどんでやると息巻き、夫人も、例のズボンの不思議な魔力でハンフリーが出世できたように思えるが、

必ずや彼に天罰が下るだろう、と拳を振りかざす。(幕)

## (1) 時代背景

初演の1919年11月は、アイルランドは英国との独立戦争のさなかにあった。この年の1月、ティペラリー州ソロヘッドベッグ(Soloheadbeg, Co. Tipperary)で、英国アイルランド警察(Royal Irish Constabulary)の爆発物護送隊をIRAが襲撃した事件に端を発する独立戦争は、5月にはリムリック州ノックロング(Knocklong, Co. Limerick)での戦闘を引き起こし、英国は7月にティペラリー州全域のシン・フェイン、義勇軍、クマン・ナ・ヴァン(Cumann na mBan) [女性補助隊] を鎮圧したが、8月には義勇軍改めIRBが勢力を持つクレア州で反乱が起き、9月7日にはコーク州ファーモイ(Fermoy, Co. Cork)で英国正規軍を攻撃した。英国のシュロップシャ(Shropshire)軽歩兵隊はこの町を報復攻撃して商店に略奪行為を加え、11月にはコーク州にも同様に報復を行なっている。初演時の動向はここまでであるが、この後も、悪名高いブラック・アンド・タンズ(the Black and Tans)の導入で戦乱は悪化し、1921年7月11日の休戦協定締結まで、アイルランドは戦乱状態にあった。

こうした事実を挙げると、首都ダブリンで芝居が上演されていたこと自体が不思議な気がするほどであり、まして本作のように政治色の濃い作品の上演は相当の勇気が必要だったことと想像される。

## (2) 英国批判の分析

### (A) 英国人の国民性批判

英国人とアイルランド人の国民性や文化の比較を中心主題に据えた演劇には、ショーの『ジョン・ブルの異島』(*John Bull's Other Island*, 1904)やマーフィ(Thomas Murphy, 1935-)の『ジーリー・コンサート』(*The Gigli Concert*, 1983)がすぐに思い浮かぶが、この劇もかなりの部分が2つの国民性の比較に費やされている。

梗概でも触れたように、細菌学や硫酸銅(copper sulphate:  $\text{CuSO}_4$ )に関して無知だからという口実で撒布官就任に二の足を踏むハンフリーに対し、アンディはイギリスの帝国主義的拡張政策が現地語や現地文化の知識など獲得しようとせずに推進された蛮行であった点を主張し、あらゆることに反対の立場をとるのが英国流だと批判して、次のように言い放つ。——「英国人はあまりにも多くの民族や事柄に否定的な態度をとらざるを得なかったものだから、自己向上するゆとりがまったくなかったのさ。」

(564)

外国語学習の長所は、自分以外の他者の言葉を学ぼうとする謙虚な姿勢の確立にあ

る、と筆者は考えるが、インドやエジプト支配に際して英国人はヒンドスターニ語やアラビア語を学ぼうとはしなかった、とアンディが言う時、彼は本当なら、アイルランド支配において英国人はアイルランド語を学ぼうとはしなかった、と付け加えるべきだったと思う。

世界中、英語で事足りると考える英国人の傲慢と怠慢は、おのずから態度に表れる。「攻勢に出るときのみ」許可される〈微笑〉は、「怖れるべき3つのもの——〈牡牛の角〉〈牡馬の踵<sup>かかと</sup>〉〈イングランド人の微笑〉」(567)の一つとして数えられるほど「不気味な」ものであり、アイルランド人の考える英国人像は、残忍非道な行為さえ、微笑を浮かべてやってのける冷酷漢であること——ハムレットを借りれば、「人は微笑み、微笑み、しかも悪党たりうる」——を示唆している。

アンディは「イングランドでは、聡明であることは、はしたないこと、と彼らは弁えて」(564)おり、「百年にわたって、イングランドは愚かさを崇拜してきた」(564)のだから、態度に「すこし無礼さを付け加え、教育委員会とかの団体の委員たちは無学文盲だと考えているふりをする」ことが、英国人らしい演技になると指導する。

それでも煮え切らないハンフリーが、自尊心を持ち出して英国人の演技に抵抗感を示すと、アンディは逆説めいて曰く、「自己否定は、いずれにせよ、自己尊重の保存薬なんだ。自己否定は人格が磨耗するのを防止する。だから、人格を保持する最良の方法は、愚か者を演じる俳優であることだ。」——これに間髪<sup>はつ</sup>を容れずハンフリーは切り返す——「愚か者とイングランド人は同意語なのかい？」(564)

この台詞は漫才のボケ役のようにあつけらかんに発されるべきか、辛辣な皮肉を込めて粘着的にぐさりと発されるべきか、ゴガティは口調のト書を台本に加えていないので、分からない。

しかしながら、「悲劇の人物には誰だってなれる」が、「喜劇を達成するのはごく少数の者に限られる」(561)のだから、他人の笑いものになる道化役者、お笑い芸人に徹することは「それ自体がひとつの偉業」(561)であると考えるハンフリーにとって、愚か者を〈演じる〉のは少しも不本意ではない。「愚か者」=「英国人」という等式は、痛烈な侮辱発言であるには違いないが、この等式によって彼が英国人を〈演じる〉ことの気後れを多少は薄れさせたことであろう。なにしろ、「英国人」は、彼が演劇芸術上、評価している「愚か者」なのだから。

## (B) 英国人の言語 (英語) 批判

アンディに言わせると、「オウ」「エイ」「アー」(Oh-eh-ah)の3語は英語の主要構成要素であり、「ひどく」(beastly)「恐ろしく」(awfully)といった粗野な言葉と、頻

繁に「すこぶる」(quite), ときどき「畜生」(damn), その他の決り文句10個があれば, ほとんどすべての英会話を構成できる。そして英語をそこまで語彙貧困な表現媒体に貶めたのはアイルランド人の自分ではなく, イングランド人たち自身なのだと批判する。(その証拠に, 学校教師アンディの台詞は, 実に語彙が豊かである。)

アンディの助言を聞いたハンフリーは, 英国人になりすますにあたって, この方針を忠実に実践に移している。彼は「オウ」(oh)を8回, 「オー」(aw)を7回, 「エイ」(eh)を7回, 「アー」(ah)を1回など, 感嘆詞を連発し, 粗野な言葉として‘bally [=bloody]’, ‘yaas [=your arse]’を各3回, ‘damned’, ‘damme’を各1回使用し, 守護聖人にちなむ英国人らしい常套句として‘by George’を5回, ‘by Gad’を2回, 口にしている。(とくに‘bally’ [573] は, 直前の役人の台詞のなかの ‘in the barony of Ballynarragh’ [バリーナラ郡で] を受けて使用されており, 音の連想が秀逸である。[斜字体は引用者])

日本語も「どうも」や「ちょっと」, 「ええ」, 「まあね」程度で会話の大半はこなせる, といった冗談は聞かれるが, 僅か17語の限られた基本語彙で日常会話を乗り切らせようとするアンディの大胆な試みは, 1920年代に入ってオグデン(C. K. Ogden, 1889-1957)が着想する, 850語からなる‘Basic English’の構想を先取りしていたと言えるかもしれない。

さらに, 実際にはアイルランド西部の〈過疎〉地域を扱う部局であるのに, 「過密地区委員会」(Congested District Board)なる部局を1891年に発足させた英国人の言語感覚の不合理性をハンフリーが指摘する台詞——「過密地区(人がごちゃごちゃいるところ)に, ライチョウの狩猟場がある光景を思い浮かべてくれよ。いやあ, まったく, あなたたちは面白い連中だなあ」(574)——もある。

### (C) 英国の官僚制や汚職批判

視察委員会の役人一行がこの作品では典型的英国人として風刺されている。彼らの登場が若干手間取るのは, 彼らが「めいめい(学校の)周りを歩き回っているわ。あの人たちは公式に学校を発見するまでは中に入れないのね」(570)と, からかわれるほどの慎重さだからである。

アンディ曰く, 「なにごとにつけ, 役人たち全員の意見が一致することは期待できないね, もっとも, 自分たちの存在理由だけは別だけど。」(570)や, アーサーがハンフリーに就任快諾を促すために持ち出す娯楽の提案——「漁業委員会と話をつけてあなたに(釣を)楽しんで貰えるように手配できるはずです。その部局はみんなとても仲がよく, よく協調していますよ, 喜ばしいことに。」(578)——は, 会議ではいかに甲



論乙駁でも、官僚機構自体の存続意義（レゾン・デートル）には一片の疑念もないこと、組織内部の人間関係を駆使してお互いの福利厚生に利便を図ることなど日常茶飯であることを物語るもので、これらはある意味では公務員体質、広くは組織全般の特性と言えるものである。

また、役所の縦割り行政、縄張り行政を批判する台詞は随所に見出される。例えば、「他には2つ建物がありますが、別の部局の管轄です」(572)、「それ（＝撒布道具の提供）は軍需係官(Minister of Munition)の管轄です」(578)、「この建物が狩猟小屋として賃貸されるに至った経緯は、教育委員会の問題です」(575)といった、他人の業務への不干渉原則の言明がそれである。

遅れて到着するアーサーを除く4名の政府役人が学校に視察に訪れるが、彼らは先輩格の「第1の役人」と同じ言動をたびたび繰り返す(571, 573, 574)。この台詞のたらい回しは行政の稟議体質を体現し、良く言えば均質・等質集団、悪く言えば没個性集団としての官僚組織の特質を風刺している。ただひとり、みんなの信望が篤く、「アーサーがいてくれたらなあ」（アーサー王待望の暗示か？）と度々頼りにされる敏腕・辣腕家のアーサーは、他の4名とは異質の切れ者ぶりを発揮し、傑出した才覚を印象づけてはいるが。

農薬散布官任命に彼らが田舎町に駆けつけたのは、年度末を控え、未執行予算を急いで消化する必要に迫られたことが原因で、未執行なら次年度から予算が減額されたり、関係者の処分もありうるという。農薬散布官の新規任命——病黴菌を早期に駆除して農作物の安定供給を図り、国民の食生活を守る——という公務の遂行が、実は担当部署の予算確保や個人の給与水準維持という保身動機に根ざしている事実は見逃せない。計画的に有意義な事業を展開し、必要ならば年度前半に前倒しして効果的に遂行するのではなく、年度末ぎりぎりになった段階で、なお予算が残って慌てふためく。こうした無作為の官僚主義やお役所仕事の弊害は、なにもアイルランドに限らず、年度末に突貫道路工事がやたらと集中する日本も同様である。また、最終的には彼らだけの裁量でハンフリーの年収が倍額に急遽改定されるのも、不正な予算流用やプール金（裏金）の存在まで疑わせる。

ハンフリーが得ようと努めた農薬散布官、原語では‘Minister of Potato Spraying’は、ヒーヴィ夫人が即座に断じるように、〈雑用係でもやれる仕事であり、担当官(大臣)は必要ない〉(562)はずである。1840年代に大飢饉を体験し、いかに主食じゃが芋の病虫害予防が大切であろうとも、個別・専任の担当官をわざわざ配置するには及ばない。その意味で、胡散臭さを伴うこの官職は、農業改革運動の政治家ホラス・プランケット(Sir Horace Curzon Plunkett, 1854-1932)が推進していた農業協同運動を

擲楡することを念頭に置いていると言われる。(この本部は、メリオン・スクウェア84番地の「プランケット・ハウス」に設置された。)

イングランドはグロスターシアの貴族の子息として生まれ、イートン校、オックスフォード大学とエリートの道を歩んだプランケットは、実家のあるミース州を毎年のように訪れたことからアイルランドの農業協同組合運動に関心を抱き、1891年には(先述したように矛盾する名称の) 過密地区委員会(Congested District Board)委員に任命され、1894年にはアイルランド農業組織協会(IAOS: Irish Agricultural Organization Society)を結成、みずから初代会長として農業の近代化に努め、1899年には農業技術指導部(Department of Agriculture and Technical Instruction)という役所の部局を誕生させることになる。プランケットはこの副部長として「農業改善、事業改善、生活改善」(‘Better farming, better business, better living’)の標語を掲げ1907年まで大いに尽力した。(この標語はのちに米国第26代大統領ロウズヴェルトが借用することになる。) ユニオニストの国会議員でありながら、アイルランド自治に熱心であり、独立後の1922年にはアイルランド上院議員に就任していることも付記しておこう。

#### (D) 諸刃の剣としての英国批判

しかし、これまで見てきたような英国批判の一方で、アイルランドも風刺の対象に取り込まれていることは見落としてはならない。偽・英国人として英国人を猿真似してきたハンフリーが、英国人として自分が通用すると判るや、変身の支援をしてくれた母親や兄弟を見捨てて、英国人の道を利己的に選択してしまうプロットがそのことを端的に示している。英国人に認められれば、英国のお墨付きが得られれば、ハンフリーにとって〈アイルランド性〉はもはや無用の長物なのである。彼が母親や兄の縁故採用を拒絶するのは、定職につかず演劇活動にのみり込んでいた彼をそれまでは軽蔑し、無能者扱いしてきた両者への痛烈なしっぺい返し、個人的報復ではあっても、心底から地方行政の透明性を尊重し、雇用の平等の原理・原則論の正しさを自覚したからだとは思えないのである。英国支配の体制にさほど憤るわけでもなく、比較的ノン・ポリだった若者が、ひとたび体制内に安住の地を確保できるとなると、体制擁護へと舵を切る。この変節、この裏切りは、ハンフリーが非難する「腐敗」に劣らず、アイルランド人の「国民的欠陥」に他ならないだろう。

#### (3) 衣装の魔力—魔法のズボン

幕開きでハンフリーは、ある公爵の役作りをしようと化粧箱の蓋の鏡を見ながら、こう呟く—「これで公爵の顔としては十分なはずだ。化粧は大いに役立つんだよな、

稽古しているだけの時でも。」(559)ドレス・リハーサルでなく、ただ白粉(ドーラン)を塗るだけの化粧や片眼鏡も、広い意味では仮面であり、衣装である。「衣服もまた仮面である。そして白粉も。」<sup>27)</sup>

そして、外見にすぎないはずの化粧や衣装が、それをまとう者の内面を規程していく。日常生活でわれわれはこうして「形から入る」ことが少なくない。〈服装の乱れは心の乱れ〉とばかりに入念な制服検査を実施する中学や高校の生活指導、リクルート・スーツを着込んで闊歩する、大学卒業予定者たちの就職活動、新調した真っ白なユニフォームで試合に臨む草野球チーム、選手名と番号の入ったレプリカを着て応援するサッカーのサポーターたち、アニメのヒーロー／ヒロインのコス・プレに陶醉するオタク族の若者たち——彼らはみな、その衣装をまとうことで衣装の持つ魔力に影響を受け、心や行動を支配される側面がある。「個人の行為が彼らの衣服によって影響され」、「集団や組織の規範への同調性は、被服のスタイル(例えば、ユニフォーム)を通して表される」<sup>28)</sup>のは、われわれの経験則からも明らかである。

ここで特筆しておきたいのは、ハンフリーが偽・英国人として演技する際に固執した芸名ジークフリートは、『ニーベルンゲンの歌』の中では、被るだけで剛力無双の透明人間になれる〈隠れ蓑〉を持ち合わせていることである。「猛き英雄が大骨を折って、かのアルプリーヒという侏儒こびとから手にいれた」「隠れ蓑を身につけると、並々ならぬ力が身内に生じてくるのであった。すなわち彼自身の力の外に十二人分の力が加わるのである。」「またこの隠れ蓑は、これを身に纏まとった人は何をしようと、だれからも姿が見えないという、不思議な作用をもっていた。」<sup>29)</sup>ジークフリートが隠れ蓑によって自らの姿を消すのと同様に、ハンフリーは英国人の衣装を身につけることで、自らの「アイルランド人性」を消し去っているのである。だが、英国人の衣を着たまま、ハンフリーは今後もずっと生きていけるのだろうか。英国人の衣服を着ていない、平凡なアイルランド人では、魅力がないのだろうか。

「オーバーシューズをはくと若者はみな素敵になる。けども、恋人よ、そんなものがなくたって君はきれいで素敵だよ。」<sup>30)</sup>——この歌詞にあるように、アイルランド人の生のままで、ハンフリーは十分に個性的で優れており、虚飾の衣装をまとして一時的に糊塗できたとしても彼のアイリッシュとしての本質は変えようがないはずである。〈魔法のズボン〉の魔法が解けるときはかならずいつか来るのであり、魔力に頼らない生き方をハンフリーは模索すべきである。

#### (4) 「演技」の本質——引き立て役としてのアンディ

芝居の冒頭は、「演技」に関する簡単な入れ子構造を提示し、異化作用を果たしてい

る。すなわち、舞台にいるのは、「公爵を演じるハンフリーを演じる俳優」である。われわれは芝居を観るとき、どんなに自然な台詞回しや所作であっても、これは予め何度も練習された言葉や動作であり、役者が「演技」をしているのだということを頭の片隅で意識することがある。舞台の登場人物のように大きな声で淀みなく喋ったり、大げさな身振りや表情を示す者は、現実には余り見られない。幕開きの数分間に観客が覚える違和感は、現実と虚構のこうした深い溝を物語るものであろう。しかしながら、少し観点を変えれば、われわれが社会的にとる行動はすべて「演技」の側面がある。大学教員は「熱心に講義をする教員」や「準備不足を必死に取り繕う教員」など、巧拙問わず、教員の様々な役柄を日々教壇で演じ分けている訳であり、すべての職業人は、職業に対する社会的要請を満足させるべく、その役回りを演じている。普通に「行為する・ふるまう」(act)こと自体が「演技する」(act)ことであり、まさしく「この世はすべて舞台」なのである。

さて、『魔法のズボン』では、ハンフリーがいかにイングランド人の演技をうまく行うかに観客や読者の注意は向けられるわけだが、忘れてならないのは、ハンフリー以上に熱弁を振るって〈愚かなアイルランド人役〉(the idiotic Irishman [567])を演じているアンディの存在である。かれは「イングランド人・ハンフリー」を引き立たせる道化の役(foil)に徹している。役人を迎えた第一声は田舎者の訛りの響く、‘Begob and begorrah, your Honours.’(572)であり、その後の発音は誇張されたアイルランド訛り(exaggerated brogue)に変わる。例を挙げれば、‘ould’ (=old), ‘indade’ (=in deed), ‘dunno’ (=don’t know), ‘wanst’ (=oncet), ‘wid’ (=with), [r]音を強烈な巻き舌で発音した‘forrums’ (=form), ‘worrums’ (=worms)などがある。

刑務所を中心に発展してきたものの、犯罪ゼロのこの町は廃れてきており、「また、いやでも賑わいを取り戻せるように、次の強制法 (Coercion Act<sup>31)</sup>)」を楽しみにしております」(572)と辛辣な冗談を飛ばしたかと思うと、犯罪ゼロであまりに暇なので、「開廷時にはいつも、判事たちは判事席で白手袋をはめてボクシングをしてるのでは？」とアンディは付け加える。犯罪ゼロであれば裁判自体が開かれなければならないはずだし、判事たちが互いに殴り合いの喧嘩をしていればそれは暴行傷害という犯罪行為そのものである。ハンフリーが即座に‘An Irish bull, oh by Gad.’(572)と応じているのは、こうしたアイルランド人特有の表現とされる非論理性<sup>32)</sup>を指摘したものだだろう。

アンディのアイリッシュ・ジョークはさらに勢いを帯び、政府が警察に命じて「三率法」(Rule of Three)を「不穩文書」ゆえに強制捜査させるほど世知辛い世の中になった、と嘆く。‘Rule of Three’とは、数学の比例式で「外項の積は内項の積に等しい」(たとえば、 $a:b=c:d$ なら $ad=bc$ )という比較的平易な法則を意味するが、政府は

「1地方(=英国領のアルスター)が統治すべきで、3地方(=独立以降のマンスター、レンスター、コナハトの共和国)は駄目」(573)、つまり「3(地方)の統治」を主張するナショナリズムの危険な政治的著作であると、数学書を誤解したからだ、とアンディはふざけて言うのである。

さらに「サマータイム法案施行以前に出かければ、雄ウサギの一羽でも仕留めたかもしれませんがねえ。夏時間に変更された以上、ウサギ連中は絶対に巣から離れませんかや」(576)という台詞は、野ウサギまでがサマータイムの立法趣旨をきちんと理解して、仕事を1、2時間早仕舞いし、自宅でのんびりくつろいでいる、というユーモアだろう。

極めつけは、品種改良を奨励する農業技術指導部(先述のプランケットにより新設された部局)から派遣された青年の言葉として、「ひとたび、雄ウサギとツチボタルの交配がうまくいけば、夜間でも、そいつの尾っぽの灯かりを頼りに猫ができる品種になるでしょう」(576)という、奇想天外なジョークである。哺乳類と甲虫目昆虫こうちゅうもくの交配によって生まれた「ウサギボタル」あるいは「ホタルウサギ」は、頭で似姿を想像するだけでも噴飯物ではあるが、1958年映画『蠅男の恐怖』をリメイクした、クローネンバーグ監督映画『ザ・フライ』(The Fly, 1986)では、瞬間転送機のなかで人間セス・ブランドルと蠅が合体してしまった蠅人間が登場する。のちにみるように、ゴガティは空想科学的発想を戯曲の題材に取り入れており、この新珍種「ウサ・ボタ」さえも、遺伝子工学の進歩が著しい今日、まったくの与太話とは限らないかもしれない。

#### (5) 重層的な言語使用

他の作品でも言えることだが、ゴガティは同じ単語を異なる意味で用いて対話の擦れ違いや掛詞の面白みを醸し出している。無論、演劇作品に掛詞は付き物だが、かなり工夫を凝らし、早くから伏線を張っているものがある。以下に、拙訳を添えて、いくつか具体例を挙げて示すことにする。(ゴシック体はすべて引用者)

[a]

Mrs Heavey. Don't talk to me about **Society** when what you want is common decency. If that's the kind of **society** ye keep…(560)

ヒーヴィー夫人 人並みの礼儀も弁えないでいて**社交界**の話なんかしないで頂戴。  
そんな風なお友だちと付き合っているのなら・・・

[b]

Humphrey. You are making money the **measure** of Art.

Mrs Heavey. Am I? I'm thinking the lads beyond have taken the **measure** of your **art** and bundled you out. (560)

ハンフリー 母さんは金銭を芸術の尺度にしているね。

ヒーヴィー夫人 そう？ 私の考えでは、(海の) 向こうの若い人たちは、お前の(俳優としての)技量に見切りをつけて (=寸法を測って) お払い箱にしたのよ。

[c]

Humphrey. … It is legitimate Art, a comedy of **manners**.

Mrs Heavey (*emphatically*). **Manners** maketh man and want of them the **fellow**. (560)

ハンフリー それは正統的な芸術、風習喜劇なんだ。

ヒーヴィー夫人 (強調して)礼儀作法が立派な人間を作り、それが欠けると凡人になるのよ。

[d]

Humphrey. … Oh, yaas, manners maketh man and want of them the **fellow** — of Oxford, eh? (577)

ハンフリー いやあ、ひでえなあ、礼儀作法が立派な人間を作り、それが欠けると文人 (特別研究員)、オックスフォード大学の、ってかあ？

[e]

Andy. To appoint a **Minister** of …

Mrs Heavey. Another **minister** and nobody goes to church but the Coastguard! (562)

アンディ 任命するためだよ、担当者 (大臣) を……

ヒーヴィー夫人 またぞろ神父さんが変われば、誰も礼拝に行くもんですか、海上保安官を除いては！

[f]

Andy. … Surely you don't think anyone would get a job for being **found out**?

Humphrey. No, but it will mean jail if I am **found out**. (563)

アンディ 相手から人材発掘して貰って就職するなんて、めったなことじゃ起きない  
だろう？

ハンフリー そうだ、でも見破られたら刑務所行きだ。

[g]

Humphrey. But where is the language that **managed to produce** Shakespeare ?

Andy. But where is the **manager** that dare **produce** him now ? (567)

ハンフリー シェイクスピアを苦勞して世に生み出した言語（英語）はどこにあるん  
だ？

アンディ いまどき、シェイクスピアを上演する気概のある支配人はどこにいるん  
だ？

[h]

Mrs Heavey (*who has been unwrapping parcel*). There's a double **seat** in  
them, for I put it in myself.

Andy. Hold them up, Mother. (*She does so.*) There you are, Humphrey, when  
you enter that, you enter England. / 'This **seat** of Mars, / the fortress built  
by Nature for herself (568)

ヒーヴィー夫人（包みを開きながら）なかにダブル・シート（尻の部分が二重生地の  
半ズボン）が1着あるわ、私が入れておいたから。

アンディ 持ち上げてみて、母さん。（彼女はそうする。）ほら、これだ、ハンフリ  
ー、その中に脚を入れれば、イングランドの地を踏むことになるんだ。—  
—軍神マルスのこの領土、自然の女神によって作られた砦

[i]

Mrs Heavey. If we only had a pair of shoes with the **tongue hanging out** he'd  
do.

Humphrey (*from behind screen*). I'm thinking I'll have my **tongue hanging  
out** before I'm done. (569)

ヒーヴィー夫人 靴底の舌革がパカパカしている靴があれば、似合うのにねえ。

ハンフリー（衝立の背後から）おしまいまでいかないうちに舌を出して（あかんべえ  
をして）やろうと考えてるよ。

[j]

Andy. They said that the **Rule** of Three was seditious literature: that one province should **rule** and not Three. (573)

アンディ 彼らの話では、「3の**法則**」は煽動的文書だそうで、1地方の**統治**はいいが、3は駄目だそうだ。

[k]

Arthur. … The grouse are gone to **dogs**.

Andy. Yes, yer honour, they do be saying them collie **dogs** is the divil for grouse. (576)

アーサー ライチョウは**流行**らなくなりましたね。

アンディ そうでさあ、旦那、みんなよく言ってますぜ、コリー犬はライチョウに目がないって。

これは「廢れる」の意味の慣用表現を、「ライチョウが犬たちのもとへ行った」と文字通りに解釈しての頓珍漢な受答えと思われる。

この他にも、いわゆる「マラプロピズム」(malapropism)と解される滑稽な誤用を2例、指摘しよう。

Mrs. Humphrey … They nearly always have a genuine Englishman **trapezing** around with them for his health. (571)

ヒーヴィー夫人 たいていいつも、健康のためにとって、一緒に**ブランコ・ブランコ**している、本物のイングランド人を連れているわ。

Andy. … Call anything that is unpleasant **irrevelant**. (564)

アンディ 不愉快なものはなんでも〈**非適切**〉と呼ぶんだ。

最初の例は曲芸や体操の「ブランコ」(trapeze)と「目的もなくぶらつく、うろつく」の(traiipse/trapes/trapse)の混同であろう。後者はもちろん「不適切」の意味の‘irrelevant’の誤用だが、音位転換(metathesis)を起こしており、単なる誤植とは考えにくい。

アイルランド語に語源を持つ単語が4例——‘sorra’(561), ‘omadhaun’(562), ‘dudheen’(567), ‘flahoulyah’(579)——使用されることでいかにもアイルランドの田舎ら



しさを感じさせ、馴染みのある諺が3例——「行ない良ければ姿また麗し」“Handsome is that handsome does.” (560), 「礼儀作法が人をつくる」“Manners maketh man” (560), 「英国人の家は城である」“an Englishman’s home is his castle.” (574) [最初の2つの訳語は戸田豊(編)『現代英語ことわざ辞典』(リーベル出版, 2003年)による]——引用されて、世俗的で慣習的な雰囲気を生んでいることも指摘しておこう。諺ではないが、ハンフリーは「芸術はそれ自体がこのうえなく大いなる報いである」(‘Art is its own exceeding great reward.’) [561] という格言を引用している。(諺としては、主語を‘Virtue’, ‘Excellence’に代え, ‘exceeding great’ 省いた形のものがある。) 実はこれは、英国の批評家・随筆家ハズリット(William Hazlitt, 1778-1830)の「学問はそれ自体がこのうえなく大いなる報いである」(‘Learning is its own exceeding great reward.’)のもじりのようで、演劇青年ハンフリーが敢えて主語を我田引水的に「芸術」に置き換えたのか、劇作家ゴガティの記憶の錯誤なのかは判然としない。ただし、ハズリットの箴言には‘Cunning is the art of concealing our own defects, and discover other people’s weaknesses.’ (「狡猾なるは、自己の欠点を隠し、他人の弱点を見つける術なり」)があり、ここでは‘art’が否定的に使用されている点が示唆的である。

#### (6) 「唾吐き」など上演上の問題点

初演を観劇したホロウェイによれば、その友人曰く、「アビー劇場でこれまでにかかった最高傑作が下手な演技で台無しにされたことで僕は憤懣やるかたない」。この感想のように、戯曲自体の完成度の高さは賞賛される一方で、長く難解な台詞も多く、役者たちの技量が問われる劇であることがわかる。総じて「才気に富む見解や警句がここかしこに散りばめられた、あまりにも長く引き延ばされた滑稽寸劇」<sup>33)</sup>、というのが大方の見方だったという。

筆者が脇筋で気になるのは、パイル氏の存在が活用されていない点である。ト書で「戦前のショックで苦しむイングランド人の病人(invalid)」(558)と説明されている彼は、唯一生粋のイングランド人としてハンフリーの演技を見破る能力を秘めている人物であり、実際、夫人はそのことに懸念を洩らし、警告を発している(571)。つまり、『ピグマリオン』の映画版『マイ・フェア・レイディ』の大使接見の宴に登場する言語学者のように、ネイティヴの知識を備えたパイル氏こそは、衣装や発音による国籍詐称を暴露する大きな脅威となりかねない人物のはずである。しかし、その彼がまったく疑念を抱かずにハンフリーのもとを去ってしまう。ハンフリーの英国人演技がそれほど完璧だったといえればそれまでだが、両者の対決によるサスペンスの見せ場が

ひとつ、失われている感がある。

ホロウェイはまったく触れていないが、草稿を通読したグレゴリー夫人が上演上、もっとも危惧を示したのは、ハンフリーがしばしば舞台上で〈唾を吐く〉ことであった。この下品な行動を修正するように夫人はゴガティに要請するが、彼はこれを受け入れなかった。ショーの『ピグマリオン』(*Pygmalion*)の初演で、イライザの悪態語‘not bloody likely’が大劇場で初めて発せられるのを観客が固唾を呑んで待ち受けたのが、1914年4月11日、まだ5年半前のこと。ハンフリーの悪態語「畜生」(‘damn’)はすでに幾分、衝撃度は低くなっていただろうが、舞台上で〈唾を吐く〉行為は、やはり異例な動作だったはずである<sup>34)</sup>。

ハンフリーは、「映画か、日本の高貴な芝居で演じているのであればなあ。それならきつと無頓着な唾の吐き方に違いない」(559-560)と嘆くのだが、映画ならまだしも分かるものの、「日本の高貴な芝居」、すなわち「能」で唾を吐く場面があるとは思えない。(ちなみにダブリン初の映画館「ヴォルタ・シネマ」(Volta Cinema)<sup>35)</sup>はジョイスによって1909年12月20日に開館したが、赤字続きで翌年の夏に閉鎖された。)ハンフリーはこの行為を弁護するために、次のように長広舌をふるう——「演じにくいけれども、着想は優れているんだ。弱まる炎に向かって唾を吐き、文化にかこつけて人生を罵倒する老公爵。人格の発現、文化の表現としてのみ耐え得る人生。美の観点から考察したときに初めて意味を露わにする人生。商人たちが国是を脅かしていたころ、断固たる意思表示によって、日本を古き武士道へと呼び戻すかのように切腹心中を遂げた、オノギ<sup>36)</sup>とその妻のように素晴らしいものなんだ。」(560)——ハンフリーが必死に高邁な文学や芸術の理論を持ち出して弁護に励めば励むほど、現実の「唾吐き」の醜悪さとの対比は著しくなるのである。

#### ④ 『不治の病人たち』(*Incurables*)

ゴガティの死後に出版された『週半ばの週末および偏見に関する随想』(*A Weekend in the Middle of the Week and Other Essays on the Bias*, 1958)に所収されており、少なくとも生前の上演記録はない。

舞台は大病院の敷地。5年来、下半身麻痺の患者パット(Pat)は、大樹の木陰で〈ザルガイ(二枚貝)売りの赤毛の娘モーリャ(Red Maurya)はいまごろどうしているだろうか〉、などと過ぎし日々を回想している。そこへ歩行性運動失調症(locomotor ataxia)患者のマイク(Mike)が、芝刈り機を歩行器代わりにしてよろよろと近づく。マイクにせがまれてパットは回想譚を語って聞かせる。モーリャに浜辺で出会った彼は、いまは満潮時だから潮干狩りには潮が引くまで時間をつぶすしかないよ、と声をかけ、生垣を抜けて茂みに分け入り、娘のショールを敷物にして座り込み、二人でお喋りに花を咲かせたという。何の話題だったのか、と問う

マイクに、新婚初夜の翌朝、「どうだった？」と訊かれるのと同様だとして、答えをはぐらかすパット。

病院管理人のジョージ(George Daly)が車椅子のダーキン夫人(Mrs Durkin)を押しながら登場。夫人は鎮静薬で熟睡中。マイクは噛み煙草と引き換えに芝刈り機を元に戻してくれるようにジョージに頼む。彼は患者の通称ブライト(Eddie Bright)が死去したことを伝える。パットは元気澆刺だったブライトの訃報に驚くが、壮健に見える者ほど耐え切れずに早死にするとジョージ。彼はマイクから半クラウン硬貨を受取り、芝刈り機を戻しに行く。

婦長を従えてヴァースコイル院長(Mr Verschoyle; Governor)が登場。体調を訊かれた下半身麻痺のパットは、半分だけ元気です、と答える。婦長はパットとマイクに、直る見込みがない以上、諦めが肝心よ、と声をかけ、パットは、不治の患者が回復して慈善施設を狼狽させるのは忘恩の極みですからね、と返事する。しかし院長は、ドニーブルック研究所のロシア人専門家が607回目の実験で、25分前に死んだ犬を蘇生させるのに成功したことを教え、この不老不死の霊薬(通称「607」)の様子を視察に立ち去る。パットは、2度も死なせるなんて最悪の動物虐待だと批判する。

舞台上手袖で棺桶の蓋が開けられ、蓋で裸身を隠して、ブライト病(蛋白尿と浮腫を伴う腎炎)で死んだはずのブライトが登場する。棺桶に記された名前は綴り字が間違っているし、代理人と会って法的措置を取る、と憤慨する。(蓋には、「イーモン・ロペス、56歳、安らかに眠れ」と、ブライトの本名が刻まれている。)代理人に会うなら昼食前に捕まえないと1週間会えない、とパットに言われて、蓋を水平に抱えて裸体を隠してブライトは退場。

続いて、婦長と院長が再登場。痩せぎすの婦長は胸の豊かな肉体に、中年過ぎの院長は20歳も若返っている。霊薬によって患者がいなくなることを心配する婦長に、この霊薬の件を世間に公表するのはしばらく控えよう、植栽花壇に撒けば熱帯林になってしまうほどだ、と、院長は答えて、二人は立ち去る。

管理人ジョージが現れ、ブライトの所在を尋ねる。門扉を開け放していたために彼に逃亡を許してしまい、研究者たちから非難されているのだという。パットはジョージに、マイクの金と引き換えに、実験室もしくは死体安置所から「607」と記された瓶を持ち出すように依頼する。無数の試験管やレトルトや瓶がある中からどうやって見つけるのか、と困惑するジョージに、数を数えて607本目、または一番高い棚の瓶だ、とパットは知恵を授け、ジョージは退場。

マイクはこの霊薬はパーキンソン病にも効果があるだろうか、いったいどこに塗ろうかと、パットに訊く。自分なら麻痺感のある背中に塗る、とパットが答えたとき、車椅子で寝ていたダーキン夫人がくしゃみをする。

ジョージが薬瓶を持って興奮して登場。死んだウサギやモルモットが跳びはねていたからこれに違いない、と瓶を示す。しかし、ラベルには「毒物」と表示されている。パットは尻込みするマイクの禿頭に薬を塗らせる。すぐに大量の毛髪が生えだし、「アビシニア出身のイタリア人」のようだとパットは評する。マイクは続いて背中にも塗って貰い、平衡感覚が戻ったか試すべく、二歩後退して軍隊式上げ足歩調で前方へどンドン歩き出す。パットもシャツを捲り上げて背中に塗って貰い、膝蓋腱反射(knee jerk)を試したところ、見事に反

応し、大喜びで踊りだす。ダーキン夫人の存在を思い出したパットは、彼女のうなじに薬を垂らす。夫人はゆっくりと目を醒まし、車椅子のエプロンをはずすと、ザルガイ拾いの娘の衣装が見える。実はダーキン夫人こそは、冒頭でパットが昔を回想した女性モーリャだったのだ。二人は時間を超えて再会を果たす。

霊薬の盗難に気づいた院長が、門扉を閉め、警察を呼んで全員取り調べだ、と叫んで退場。解雇に脅えるジョージに、薬瓶は如雨露に放り込み、何食わぬ顔で水遣りをするようにパットは忠告する。巡査部長の取り調べ開始の声が奥から聞こえる中、夫人とパット、マイクは木の下に座り、ジョージは芝生に散水を始める。芝生が伸び始め、3人の姿が見えなくなるなか、「緑が我々を覆いつくす」という趣旨の歌声が響き、やがてボルガの舟歌のように照明と共に消えていく。再び照明が点されると、舞台は一面の緑となっている。(幕)

不治の病を患う人々を描きながら、この作品は幻想的な明るさを漂わせている。いわばSFファンタジーの趣が、終盤はとりわけ色濃い。処女作『荒廃』が医療施設の墮落や腐敗を辛辣に暴き出すことを主題に据えていたのに対し、「不老不死の霊薬」という、架空の妙薬、いわばリアリズム演劇上の禁じ手を導入することで、誰もが元気に若返り、植物までが繁茂して終わる大団円を迎えているからである。

パットの若い時代の恋人モーリャが、同じ病院の患者ダーキン夫人だったという展開は、数十年の歳月が2人の面影をすっかり変貌させ、病院内で会ったとしても互いに認知できないほどだったことを暗示する。モーリャは別の男と結婚して「ダーキン夫人」となり、2人は結ばれぬままに世を去るはずだった。しかし、霊薬は2人を数十年前の若さに引き戻した形で再会させた。霊薬の有効期間はどのくらいなのか、一度服用すれば永久に人間は死滅しないのか、そうした野暮な詮索は止すことにしよう。

主題は『荒廃』と似通っているが、毒気は抑えられている。とはいえ、不治の病の患者に対し、希望に満ちた呼びかけではなく、「諦めが肝心よ」と言い放つ婦長は、医療従事者としては不適任な印象を強く与えるだろう。〈不治の患者が治癒してしまう事態は病院に対する恩知らずである〉というパットの台詞には、病気の治癒は、不治と診断した医師の判断の正確さや、いつまでも患者をそのままの状態を抱えておけば得られる病院経営の安定を揺るがすことを意味するという皮肉がこもっている。

筆者はこの作品の読後に、アメリカ映画『K-PAX 光の旅人』(K-PAX, 2001)に通じる雰囲気を感じた。この映画では宇宙の1,000光年の彼方にある標題の星から来た(と自称する)不思議な男ブロート(ケヴィン・スペイシー)が登場し、霊薬の代わりに、彼の神秘的な感化のお陰で、入所患者たち(ミセス・アーチャーやアーニー)が自己治癒力に目覚め、その容態が著しく改善されていく。人間を元気づけ若返らせるのは化学合成の薬物ではなく、むしろ生を信じる力かも知れないと思わせる点が共通している。

⑤ 『波長』 (*Wave Lengths*) (未完)

1930年代後半に執筆され、移米後も推敲の努力がなされたこの作品は、エーテルから生の音声を取り出す機械が発明され、悪辣な広告業者がこの機械を恐喝に悪用しようとする。テキストには、第2幕第3場、第3幕第1～4場が掲載されているが、前半部分が散逸しており、全体像は明らかでない。掲載部分だけで30頁あり、完成稿が見つければ『荒廃』を上回る長編戯曲であることは間違いない。ガンジーやバーナード・ショー、ヒトラーやチャーチルまで大物の歴史上人物が登場し、悪役レオポルド (Leopold) が広告業者とされるこの芝居は、かつてゴガティがモデルとされる登場人物(マリガン)を配された『ユリシーズ』の、レオポルド・ブルーム (Leopold Bloom) に対抗して意識的に創作されたとも評されるだけに、完成稿で残存していないのが惜しまれる。

第1幕 第1場 (原稿散逸)

原稿は全くないが、<第3幕第3場と同じ場面>とのト書きより、(米国マサチューセッツ州コッド岬南方の) ナンタケット島 (Nantucket) 沖合いの、ある小島に住むフレンジー博士 (Dr. Frengly) なる大学教授が、<エーテル> から音声を取り出すことができる奇想天外な発明をしたらしい。人間がいったん発した音声は消えてなくならずに、このエーテルにとどまり、過去の発話であってもこの機械を使えば、第三者が自由自在に、録音再生機のように再現できるらしい。ギリシアの諺にあるように、まさしく「一度発せられた言葉は取り返しがたい」<sup>37)</sup> 重荷となる事態がこの機械によって生まれたわけである。<エーテル> は、広辞苑によれば、「酸素原子に2個の炭化水素基の結合した形のある有機化合物の総称。一般に中性で芳香ある液体。固体のものもある」とのことだが、話の展開から判断してこの化学薬品の意味ではなく、「初め光の伝播を媒介する媒質としてホイエンスが仮定し、のち一般に電磁場の媒質とされた物質」を指すものと思われる。ただし、これは「相対性理論によってその存在が否定された」という。なお、エーテルについての百科事典の専門的な記述<sup>38)</sup>を参考までに注に引用しておく。

この発明をレオポルドなる広告業者が我が物にしようと、博士の一人娘ビアンカ (Bianca) に近づき、彼女はレオポルドに好意を抱いてしまったようで、ビアンカを好きなレイモンド (Raymond) は苦境に立たされている。

第1幕第2場～第2幕第2場 (原稿散逸)

第2幕 第3場 ニュー・ヨークの株式会社『波長』の壮麗な本社ビル。サム・クローゼンハマー (Sam Klawsenhammer) が、この波長機を購入して過去の失言を取り戻す必要に迫られた顧客を接待する。最初の婦人客は、若い男に誘惑されて夫と離婚するように迫られ、そのときのやりとりを夫に聞かれないのだと

いう。サムは大いに同情する。

2番目の50歳位の婦人は、現在玉の輿結婚を果たしたが、かつての夫たちに発した「愛」という常套句を、悪意ある女たちが夫の耳に入れることを怖れている。顧客たちは暗い個室に案内され、そこで取り返したい言葉を再現して発するのだが、その部屋の担当者のサウス(Sammy Souse)が出てきて、老婆ばかりだと苦情を洩らす。客は選べない、と反論するサムに、年寄りは無用、と念を押してサウスは戻る。

3番目に金髪の美女が登場。彼女も1週間ほど前に使った愛の言葉を取り返したいのだという。付き合っている男が彼女の服を着て女装趣味を示したので、早く別れて別の男性と結婚したいらしい。4番目にヒモ稼業の男(a Gigolo)が入室。本気でないのに人妻(1番目の婦人)を口説いているが、実は金髪女性(3番目の女性)と婚約中だという。サムは憤慨してこの男を追い返す。サムはサウスを呼び出し、ヒモ男の悪行を金髪女性の面前で暴くために彼の音声を音声復元機にかけようと提案する。

5番目の登場人物はヤギを連れたガンジー('Mahatoma' Gandhi, 1869-1948)。続いて6番目にメモ帳を持ったバーナード・ショー。サムはショーに、あなたは話したことを残らず活字にしており、活字は取り返せないから顧客の対象外だと告げると、なにもかもでたらめだ、大衆の記憶など1日と持たないのだから、とショーは反論。ガンジーとショー、2人の大思想家の対話が始まり、サムはガンジーを促して別室に向かわせる。ショーは、この機械が恐喝などの犯罪に悪用されることを危惧し、人間の記憶力が10年以上持つならば政治家たちの変節が見抜け、戦争はなくなるだろう、と演説する。ガンジーがサウスと戻ってきて、自分が知りたいのは歴代のインド総督たちの約束と内輪の会話だと言う。ショーは、戦争でさえもが広告になった、と嘆き、ガンジーと立ち去る。

**第3幕 第1場** ドイツ第三帝国の会議室。宣伝相ゲッベルス(Joseph Goebbels, 1897-1945)と外相リッペンントロップ(Joachim von Ribbentrop, 1893-1946)が、株式会社『波長』の広告チラシを前に、オーソン・ウェルズの火星襲来やくエイブラム博士の秘密箱>同様のいかさまだろうと考える。ベルリン大学の電波専門家ヒルシュ(Fritz Hirsch)が呼ばれ、音声の復元は理論上は可能で、復元された音声の再復元も可能である、と報告、高度技術があれば、マイクなしでもこの会議室の会話が英米で盗聴可能であり、『波長機』の発明者を誘拐するか、機械を破壊するしか対策はない、と断言する。

フランキー(Flunkey)の前触れで、陸軍将校ブラウヒッチ(Walter von Brauchitsch, 1881-1948)、陸軍元帥リープ(Wilhelm Ritter von Leeb)、陸軍元帥ボック(Fedor von Bock, 1880-1945)、陸軍元帥ルントシュテット(Karl von Rundstedt, 1875-1953)が続々と入室。ヒルシュは、新発明の機械により盗聴の危険性があるため、この会議室での発言を控えるように促す。そのため、ヒトラー(Adolf Hitler, 1889-1945)総統が姿を見せても、みなは唇に指を押し当てて挨拶もしない。ゲッベルスは事情を釈明し、会議の延期または筆談による会議を提案するが、ヒトラーは砲艦や秘密警察(ゲシュタポ)の派遣を命じる。しかし、この命令も英米に筒抜けの可能性を指摘されると、平和的手段で機械を購入し、世界破壊に悪用されぬようにする、と言を改める。通りでは群衆の歓呼の声が響き渡り、会議の様子がすでに人民に洩れていることが明らかになる。ヒトラーは会議の無期限延期を宣言して退出。残された者たちは不安げに広告チラシを眺める。幕。

**第3幕 第2場** 英国首相チャーチル(Sir Winston Churchill, 1874-1965)が情報相ブラッケン<sup>39)</sup> (Brendan Bracken, 1901-58)に新発明の信憑性を問いただす。アイルランド人想像力の所産にすぎぬ、と懐疑的な首相に、*Daily Express*の出版者で保守党政治家ビーヴァーブルック(William Maxwell Aitken, 1<sup>st</sup> Baron Beaverbrook, 1879-1964)なら、テレビの潜在的可能性に造詣が深く、信頼できるとブラッケンは提言する。折りしも、電話がかかり、発信者は他ならぬビーヴァーブルック。彼は空軍総司令官ゲーリング(Hermann Goering, 1893-1946)やブラウヒッチの声の傍受に成功したので、自分のもとに来てほしいと告げる。国王が首相を召還することはあってもその逆はないのに、首相の自分が一議員に呼び出されるとは、と不満を洩らすチャーチルだが、ドイツ帝国閣議を傍受できると知って、無線を部屋に運び込ませ、波長(周波数)を合わせる。第1場での会話が流れてくる。機械の性能を確信したチャーチルは、発明者のいる島はアメリカ領土であるから軍艦を派遣するわけにはいかないが、発明者と直接交渉して機械を利用する秘密工作を進めるよう、指示する。幕。

**第3幕 第3場** 島の切妻風の小屋。レオポルドに騙されていると懸命に訴えるレイモンドだが、ビアンカは信じない。父親のフレングリー博士が登場し、2人を冷やかすので、ビアンカは港へ向かう。博士はベルリン市民に、ヒトラーたちの閣議の様子が傍聴できると無線放送で知らせて好首尾を収めたと自慢し、ブラウヒッチの音声を認識したからヒトラーとのやりとりが傍聴できる、と告げる。2人が小屋に入って操作すると、ブラウヒッチとヒトラーの会話が流れる。彼らは盗聴防止機能が作用していると安心しており、博士を拘束するために2隻の駆逐艦(destroyer)を派遣する予定である、と話している。

ビアンカが戻り、『波長』の社員クリターハウス(Clitterhouse)が、「ホーホー脚」の英国向けの宣伝放送を受信していたため逮捕された、と知らせる。博士は『波長』社の会議を盗聴するべく小屋に入る。会議で発言するレオポルドの気取った小声が聞こえ、ちょうど会議中にビアンカからの電話を受けている。金髪娘か、と冷やかすサムに、ビアンカは「目的遂行の手段にすぎないさ」とレオポルドは答える。ビアンカは、もう聞きたくないと言き出す。幕

**第3幕 第4場** 明け方の小屋。教授はレイモンドの協力を得て、発明品の小型携帯複製品を徹夜で完成させた。レオポルドの二枚舌が見抜けたこと、娘ビアンカとレイモンドの関係が修復したことを喜び、小型版をアメリカ政府か軍関係に渡すようにレイモンドに託す。シェリー(Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)の『鎖を解かれたプロメテウス』(*Prometheus Unbound*, 1820)の一節<sup>40)</sup> (第2幕第4場)を引用し、英独いずれの海軍が先に到着するかと待ち受ける。一番乗りはドイツ海軍のナイデルマイヤー大尉(Otto Neidelmeyer)とフロイリング大尉(Kurt Freuhling)で、駆逐艦への同行を拒否するなら機械を完全破壊すると脅す。博士は機械のダイヤル回す。流れてきたのは、二人の大尉の妻がそれぞれ他方の大尉と浮気している場面の会話。2人が互いに激怒するや、サイレンが響き、英国軍艦の寄港を告げるので、2人は慌てて退場。

続いて2人の英国人提督ハリヤード=トッペンナム(Halyard-Toppenham)とギヤスケット=スパーリング(Gasket-Spurling)が登場。発明品の英国政府への譲渡もしくは専有使用を丁重な口調で申し出る。海で一斉砲撃の音が轟き、双眼鏡で提督たちが確認すると、さきほどのドイツ人大尉たちが駆逐艦で決闘をし、互いに

沈没しているのだった。博士の勧めで提督は機械のダイヤルを回し、教会での教区牧師の話からビアンカとレイモンドの縁談が進行中のようなのである。(ここで一部、原稿散逸。)さらに2隻のイタリア軍艦が双眼鏡で見えるが、甲板に洗濯物を干しており、博士は文字通り「人前で汚いリネンを洗濯して(=内輪の恥をさらしている)」と冗談を言う。イタリア軍艦も博士の機械操作で内輪揉めの砲撃が始まる。博士は提督たちに朝食を共にすることを依頼し、初めてこの機械で認識した音声を流す。それは、シェイクスピアの『ソネット』第1編の冒頭句<sup>41)</sup>で、提督たちは教養がなくて判らないが、博士は2人と祝杯を挙げる。

電磁波は光と同じ性質を持つことを実証したヘルツ(Heinrich Rudolph Hertz, 1857-94)やロッジ(O.J.Lodge, 1851-1940)の発見を実用化して、イタリアの電気技術者マルコーニ(Guglielmo Marconi, 1874-1937)が無線電信を発明し、大西洋を隔てて送受信に成功したのは、ほんの百年前の1901年。携帯電話の急速な普及やインターネット通信網の拡張に慣れっこになったこんにち、音声が届地に瞬時に送達できたり、録音機で記録・再生できることの驚異感を現代人はすっかり忘れてしまっているだろうが、考えてみれば不思議な現象である。この『波長』は、ある意味ではSF的なからくりを前提に、大戦中の英独軍指導者たちをコミカルに描きつつ、また言葉の持つ重みや味わいを考察させつつ、科学技術の進歩の方向次第では、必ずしも荒唐無稽とは言い切れない未来科学的状況に近い将来、出現する可能性をわれわれに示している。

## ⑥ その他

以上の5篇の他に、ゴガティの筆になるいくつかの断章が残されている。2場からなる1幕の断章は、アーサー王の宮廷があったとされるウェールズ南東部の町の名前である『カーリーオン』(*Caerleon*)あるいは『軍団の野营地』(*The Camp of the Legions*)という標題の戯曲の草稿だった可能性があるという。また、『消耗した病棟』(*The Worked-Out Ward*, 1918年出版)という1幕物は、グレゴリー夫人の『救貧院病棟』<sup>42)</sup>(*The Workhouse Ward*, 1908年4月20日初演)のパロディであり、グレゴリー夫人の戯曲全集に補遺として収録されている<sup>43)</sup>が、実際の著者はゴガティと考えられているようで、ゴガティのテキストにも補遺として収められている。『救貧院病棟』は、グレゴリー夫人とダグラス・ハイド(Douglas Hyde, 1860-1949)の合作『救貧院』(*The Poorhouse*, 1907年3月9日初演)を、夫人が会話部分を全面的に改稿した作品であり、したがってこの『消耗した病棟』は『救貧院』のさらなる変奏曲という位置づけになる。

そういう事情でauthorshipが確実とは言えないので、『消耗した病棟』の粗筋などの詳述は避けるが、政治家病棟の入院患者2人—ディロネル(John Dillonell)とグウィナ



ニー(Stephen Gwynerney)ーがベッドに寝たままお互いに激しく中傷合戦を繰り広げている。前者は東メイヨー選出の国会議員でアイルランド国民党党首も務めたディロン(John Dillon, 1851-1927), 後者はアイルランド文藝協会書記やゴールウェイ選出の国民党議員を歴任し, TCDの神学教授を父親に持つグウィン(Stephen Lucius Gwynn, 1864-1950)を指すことは綴り字からして誰の目にも明らかであろう。途中で田舎女フーリハン夫人(Mrs Houlihan)が登場。アイルランド国旗の3色のショールを纏ったこの女性は, もちろんアイルランドの象徴である。パーネル失脚の運動を起こしながら, アイルランドの人々への責任感に欠ける2人の態度に業を煮やして, 夫人は出て行く。残された2人は再び口論を始め, 前者は『フリーマンズ・ジャーナル』(カトリック・ナショナリスト系), 後者は『アイリッシュ・タイムズ』(プロテスタント・ユニオニスト系)を相手に投げつけ, 罵詈雑言は果てしなく続く, という風刺劇である。実在する政治家がまだ存命のときに大胆にも刊行されたが, 上演記録が見当たらないのは, やはり名誉毀損を心配してのことだろう。

### (Ⅲ) おわりに

以上, ゴガティの5篇の演劇作品を概観してきた。簡単にそれぞれを要約しておこう。

『荒廃』は, ダブリンのスラム街を一掃するためには予防医療の重視こそ必要だと説く, 若い医者としてのゴガティの使命感が感じられる作品である。理屈っぽい台詞の多用や構成の難に批判はあるものの, オケイシーの3部作へとつながっていく重要なデビュー作品である。

『深刻な事柄』は, ローマ帝国におけるキリスト教徒たちに, 大英帝国におけるアイルランド人を投影し, この当時流行した救世主願望の託された作品である。

『魔法のズボン』は, やはり英国による支配・統治を枠組みに, 被支配者が支配者側に成り上がるためには, 支配者側のエトスを獲得せねばならないことを, 英国に対すると同時にアイルランドへの批判をこめて, 抉り出している。

『不治の病人たち』は, 不老不死の霊薬を題材に不治と診断された患者たちの若返りの夢が実現する喜びを幻想的に描いている。

未完の『波長』もまた, エーテルから過去の発話を再現できる機械の発明によって, 人間の利根的妄言や節操のなさが暴露され, 恐喝や政治的陰謀がはびこるという空想的設定を描いている。

総じて, ゴガティの演劇には外科医の目から見た人間観が顕著である。『深刻な事柄』では医術の究極の目的である死の克服が, 死者ラザロの復活に読みとれるし, 『不治の

病人たち』の不老不死の霊薬の発明も、医学や薬学の理想でありながら、死なないことは本当に幸福なのだろうか、とふと、考えこませる。『波長』は物理学・光学などの科学技術の知識がなければ構想自体が不可能な作品であろうし、冷徹な人間分析や難解な医学用語の多用は、ゴガティ演劇の特色の一つであると言えよう。ほとんど黙殺されてきたゴガティ演劇が今後、再評価され、舞台上演されることを期待したい。

拙稿は、2005年10月15日開催予定の第57回日本英文学会中部支部大会（愛知大学）および10月29日開催予定の第58回日本英文学会中国四国支部大会（香川大学）での口頭発表の準備草稿として書かれたものである。

### 注

- 1) 英語の発音は「ゴウガティ」に近いが、研究書等の一般的表記に倣い、「ゴガティ」とした。
- 2) Austin Reid, *Irish History 1851-1950* (Co. Dublin: Folens Publishers, 1980), p.268.
- 3) J. B. Lyons, *Oliver St. John Gogarty: the Man of Many Talents* (Dublin: The Blackwater Press, 1980), p.48.
- 4) 建築家Sir Thomas Deaneの旧居で、ムアの向かい側に位置していた。現在は、Royal Hibernian Academyの建物。Robert Hogan and Michael J. O'Neill, *Joseph Holloway's Abbey Theatre: A Selection from his Unpublished Journal Impressions of a Dublin Playgoer* (Carbondale and Edwardville: Southern Illinois University Press, 1967), p.111, p.279.
- 5) オケイシーの『鋤と星』(*The Plough and the Stars*, 1926)の初演2夜目に感想を聞かれたゴガティは、「独り善がりな連中(the smugminded)に考える種を与えるだろう」から、この作品は気に入った、と答えている。*Joseph Holloway's Abbey Theatre*, pp.252-253.
- 6) James F. Carensは、「つまり、『荒廃』は99.99%の純度でゴガティ作である」としているほどである。*The Plays of Oliver St. John Gogarty* (Proscenium Press, 1971), p.10.
- 7) この筆名を、単独の作家と受け止めた著者もいる。“...one who named himself 'Alpha and Omega'...” (Andrew E. Malone, p.211.)
- 8) J. B. Lyons, *Oliver St. John Gogarty: the Man of Many Talents* (Dublin: The Blackwater Press, 1980), p.31.
- 9) この2人の医学生は、ゴガティの同名の卑猥な詩‘Song [Medical Dick and Medical Davy]’(*The Poems & Plays of Oliver St John Gogarty*, p.435.)でも登場し、巨根(a Bloody Big Prick)を持つDick（この名前自体にもpenisの意味がある）が、Davyに肉汁をねだる話である。『荒廃』の中では、それまでの陰鬱なスラム描写からの息抜き(comic relief)の役割を果たしている。
- 10) モレク(Moloch)は、フェニキア人が子どもを人身御供にして祭った神。『レビ記』には「自分の子を一人たりとも火の中を通らせてモレク神にささげ、あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。」(18章21節)、『列王記 下』には「王はベン・ヒノムの谷にあるトフェトを汚し、だれもモレクのために自分の息子、娘に火の中を通らせることのないようにした。」(23章10節)と言及されている。
- 11) J. B. Lyons, *Oliver St. John Gogarty: the Man of Many Talents* (Dublin: The Blackwater Press, 1980), p.31.

- 12) *Joseph Holloway's Abbey Theatre*, pp.194-195.
- 13) Ulick O'Connor, *Oliver St John Gogarty: A Poet and his Times* (London: Jonathan Cape, 1964), p. 151.
- 14) アンドリュー・E・マローン (久保田重芳 訳) 『アイルランドの演劇』 (大阪府箕面市:富岡書房, 1989年), pp.332-3. なお, 原著は Andrew E. Malone, *The Irish Drama* (New York & London: Benjamin Blom, 1929/65) で, 該当頁はp.275.
- 15) 雌狼に育てられたとされるロムルスとレムスは, 新都支配権を巡って争い, レムスは殺される。「この日が新都の誕生日とされ, 新しい都市は, 単独で支配権を握ったロムルスに因んで「ローマ」と名付けられた。前753年4月21日のことである。ローマでは, この年を紀元としている。」——青柳<sup>まさのり</sup>正規, NHK「ローマ帝国」プロジェクト『NHKスペシャル ローマ帝国I 誕生 ローマ帝国の高まり』 (日本放送出版協会, 2004年), p.187.
- 16) <ラザロ>は, 「ヘブル語エレアザルのギリシャ音訳<神は助けられた>という意味。」「病死後4日目であったが, イエスによって甦えさせられた。それはイエスの神的な力による死からの復活である。これによりイエスを敵視するものは, 民衆への影響を恐れてイエスの捕縛と死を求めることとなった。ラザロの甦りは, イエスの復活とは意味を異にするものであるが, イエスの死と復活の予表ともみられる。また信じるものが, 復活の生命にあずかる真理もここより告知されている。」—『聖書辞典』 (新教出版社, 1968/85年), pp.518-9.
- 参考までに『ヨハネによる福音書』11章から12章にかけて関連する記述を部分的に引用する。——「ある病人がいた。マリアとその姉妹のマルタの村, ベタニアの出身で, ラザロといった。このマリアは主に香油を塗り, 髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。(中略) イエスが行って御覧になると, ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。(中略) 墓は洞穴で, 石でふさがれていた。イエスが「その石を取りのけなさい」と言われると, 死んだラザロの姉妹マルタが, 「主よ, 四日もたっていますから, もうにおいます」と言った。(中略) 人々が石を取りのけると, イエスは天を仰いで言われた。(中略) こう言ってから, 「ラザロ, 出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると, 死んでいた人が, 手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に, 「ほどいてやって, 行かせなさい」と言われた。(中略) 過越祭の六日前に, イエスはベタニアに行かれた。そこには, イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。(中略) ラザロは, イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。」 (日本聖書協会『聖書 新共同訳』, 1992年)
- 17) 「トニック・ソルファ」は, 英国・ヨークシャーの聖職者ジョン・カーウェン (John Curwen, 1816-80) によって1841年から推進され, 1843年, 彼の『声楽入門』 (*Grammar of Vocal Music*) によって広められた。
- 18) 第1次大戦直後で, 軍国主義教育の名残だろうか。常識的な定義文なら「大陸は, 地上の巨大な陸地の塊のひとつである」, 「島は, 水に完全に囲まれている一片の土地である」 (『ロングマン現代アメリカ英語辞典』) が妥当なところ。
- 19) フランス語の 'vain desir' は, 'vain desire' (「虚しき欲望」) の意味。この作品の他のフランス語は, "Aubientot." (579) なる誤用が役人の滑稽味を出すために用いられている。
- 20) 'minister' は, 大きく3つの意味合い—「聖職者」「大臣」「公使」—が辞書には挙げられている。この作品の文脈では, 「大臣」が最も近く, ゴガティは敢えて「農薬散布担当大臣」なる特命相をでっち上げ, 誇張された滑稽さを提示していると思われるが, 作品中で行われるように, 委員会が公示して一般人から選出するという性格を考慮すると, 本来, 内閣総理大臣が任命すべき「大臣」とはやはり別種と見なさざるを得ない。従って, 「担当官」という訳語を当てた。

- 21) 年収1,200ポンドの価値がいかにばかりのものか、把握しておく必要がある。B.R.ミッチェルの『イギリス歴史統計』（原書房、1995年）所載の〈イングランド・ウェールズにおける名目年間賃金表〉（p.153.）によれば、1911年には、農業労働者46.96ポンド、一般労働者74.04ポンド、上級公務員161.61ポンド、教員176.15ポンド、聖職者206.00ポンド、事務弁護士・法廷弁護士1,343.50ポンドである。年収1,200ポンドは従って弁護士に匹敵する収入である。また、初演時の1919年に絞ると、〈イングランド南部の建築職人と建築労働者の名目賃金表〉（p.165.）が参考になる。それによれば、10時間あたりの労働に対して、建築職人は170ペンス、建築労働者は140ペンスを得ている。仮に1日10時間労働、年間260日（ほぼ週5日）として計算すると、建築職人の年収は184.17ポンド、建築労働者は151.67ポンドとなる。さらに、〈イングランド・ウェールズの農業労働者の基本時間に対する平均最低賃金表〉（p.163.）によれば、1918年7月から1919年5月の期間に、週あたりの平均最低賃金は30シリング6ペンスであった。これを年間に換算すれば、79.3ポンドになる。いずれの場合も1,200ポンドには遠く及ばないことは明らかである。（下線は引用者）
- 22) Siegfried Stottなる名前はサクソン＝アングリカンの名前であり、アングロ＝サクソン人に敬意を表して選んだのだ、とハンフリーは説明する。この名前に「オペラの響きがある」（565）というのは、もちろんワーグナー（Richard Wagner, 1813-83）の『ニーベルングの指環』（*Der Ring des Nibelungen*, 1854-74）の第2部『ジークフリート』への言及。岩波文庫の『ニーベルンゲンの歌』（相良守峯 訳）では「ジークフリート」と表記されている。表記の相違は伝説の相違に由来し、石川栄作『ジークフリート伝説 ワーグナー『指環』の源流』（講談社学術文庫、2004年）には、夥しい種類の伝説と流布がまとめられていて、圧巻である。
- 23) ノーフォーク・ジャケットの特徴は、ツイードのジャケットでボタンは3ないし4個、ベルトまたはハーフ・ベルト、動きやすくするプリーツ、弾丸や装備をしまえるゆったりとした下方のポケット付き。スポーツ・ジャケットの走りときれ、ノーフォーク公爵が自分の領地で19世紀に初めて着用したことから命名された（いわゆる「名祖」）。Bernhard Roetzel, *Gentleman: A Timeless Fashion* (Konemann, 1999), pp.120-121, p.350.
- 服飾史家の中野香織の連載記事「モードの方程式」（『日本経済新聞』2005年3月11日、p.31.）によれば、猟犬の歯形に似た模様（hound's tooth check）—日本語では「千鳥格子」—が多用された狩猟用のジャケットであるという。
- 24) 指示棒で音符を指して返事を教えるという方法は、日本の古典落語にも同様な例が見られる。『ろくろっ首』では、夜になると首が長くなる奇癖を持つ娘との縁談に応じた男が、下帯（禪）に結んだ紐を世話役から1回引つ張られると「さよう、さよう」、2回なら「ごもつとも、ごもつとも」、3回なら「なかなか、なかなか」と挨拶の受答えをする取り決めになっている。さて、この巧妙で滑稽な合図は、雄弁を身に付けたハンフリーにはもはや必要がなく、アンディはその分、自由に彼なりの「ステージ・アイリッシュマン」を感じさせる演技に専念できている。
- 25) 第2幕第1場、死期迫るジョン・オヴ・ゴントが熱烈にイングランド頌歌を謳いあげる一節。「この尊厳にみちた王土、この軍神マルスの領土、／この第二のエデン、地上におけるパラダイス、／自然の女神が、<sup>とつくに</sup>外国からの悪疫を防ぎ、／<sup>いくさ</sup>戦の手から守らんとて築いた、この砦、」[斜字体はゴガティの芝居では省略されている箇所、引用者による]（小田島雄志訳『リチャード二世』、白水社、1983/1988年、pp.55-56.）
- 26) 救貧院は、1838年の救貧法によりアイルランドに導入された制度で、文字通り、貧者を收容した。建物は英国人建築家ウィルキンソン（George Wilkinson）が設計し、家具調度は最低限に抑えられた。特徴は、入所にあたり家族単位であることが要求されたことで、個人の入所は拒否された。しかしながら、所内では男性、女性、子ども（2歳以上）に振り分けられ、別棟に收容された。食事は粥（ポリッジ）、じ

ジャガイモ、牛乳が主で、規律は厳しく、石割などの肉体労働が課せられ、子どもたちは救貧院学校で学ぶことを義務付けられた。1921年の独立以降のアイルランドでは、救貧院は老人ホームや病院に改編されたり閉鎖された。[S. J. Connolly (ed.), *The Oxford Companion to Irish History* (London: Oxford University Press, 1998)] この作品は、独立直前の時期であるから、本来の設置趣旨の通りの救貧院であったと思われる。

前述の「家族単位という規則と食事時はいつさい無言などスパルタ風の厳格な雰囲気、人々にこの施設の門をくぐることを大いにためらわせた」という。——ラリー・ザッカーマン (関口篤 訳) 『じゃがいもが世界を救った ポテトの文化史』(青土社, 2003年), pp.263-264.

- 27) E.ルモワヌ＝ルッチオーニ(鷲田清一, 柏木治 訳)『衣服の精神分析』(産業図書, 1993年), p.67.[原著名Eugenie Lemoine-Luccioni, *La Robe* (Paris: Editions du Seuil, 1983)] .
- 28) S.B.カイザー (高木修, 神山進 監訳)『被服と身体装飾の社会心理学 (上巻) 装いのこころを科学する』(京都:北大路書房, 1994年), p.145.
- 29) 相良守峯 (訳)『ニーベルンゲンの歌 前編 (全2冊)』(岩波文庫, 1955/2004年), p.97.
- 30) P.G.ボガトゥイリョフ(松枝到, 中沢新一 訳)『衣装のフォークロア』(せりか書房, 1989年), pp.120-121.
- 31) 1800年から1887年の間に英国政府によって65本を越える強制法がアイルランドに課せられた。1833年4月2日の擾乱抑圧法は、アイルランド総督が擾乱地域と宣言した地域での公的集会の禁止、夜間外出禁止令、裁判なしの3ヶ月間拘留、軍法会議の実施が認められた。1847年の犯罪・不法行為法は、擾乱地区への警察派遣費用を住民負担とし、人身保護令状の中止など様々な弾圧法が施行された。Peter R. Newman, *Companion to Irish History 1603-1921: From the Submission of Tyrone to Partition* (Oxford and New York: Facts on File, 1991), p.33.
- 32) <アイルランドの雄牛>とは、自己撞着の表現ながら、一見もっともらしく聞こえ、印象的なほど滑稽なものを指す。マハフィの定義では「この雄牛はいつも孕んでいる」のだそうである。『リーダーズ』では「子宝に恵まれないのが彼の家系の遺伝だった」を例文として挙げている。  
マライア・エッジワース (Maria Edgeworth, 1767-1849)にはその名も *An Essay on Irish Bulls* (1802)がある。この書の第5章は'The Criminal Law of Bulls and Blunders'と標題が付けられ、アイルランド人の英語用法に対して英国人が批判的であることが述べられている。Brian Hollingworth, *Maria Edgeworth's Irish Writing: Language, History, Politics* (London: Macmillan Press, 1997), p.49.
- 33) *Joseph Holloway's Abbey Theatre*, p.206.
- 34) 映画『タイタニック』(*Titanic*, 1997)では、3等船客の主人公でアイルランド人のジャック・ドーソン(レオナルド・ディカプリオ)が上流階級の若いアメリカ人女性ローズ・デウィット・ブクター(ケイト・ウィンスレット)に唾の吐き方を甲板で教授する場面がある。男性労働者なら黙認できても、上流階級の女性が人前で唾を吐くのは大変に破廉恥なことだったはずであり、通りかかった彼女の母親らは困惑を隠せない。
- 35) A. Nicholas Fargnoli and Michael Patrick Gillespie, *James Joyce A to Z: The Essential Reference to the Life and Work* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1995), p.228.
- 36) オノギ(Onogi)はおそらく「ノギ」(Nogi) の誤りで、陸軍大将・乃木希典(1849-1912)を指すものと思われる。根拠は①夫妻揃っての心中(妻・静子とともに自害)②没年が戯曲初演の7年前の1912年(9月13日夕刻8時前)であることを挙げよう。

①について詳述引用しよう。「綿密な検死に」よれば「夫婦の死は自刃によるものと確認された。乃木夫妻は切腹の古式に従って殉死したのであった。」「乃木は坐して上着をぬぎ」「ズボンのボタンをはずし

てシャツを押しあげ、鋭い切尖で三度、下腹部を切った。次いでズボンのボタンをていねいにかけてのち、刃を上、軍刀の柄を膝の間に立てると、死へ向かって身を投げた。刃はうつ伏した將軍の頸部をつらぬき、頸動脈を裁断した。たたみの上に鮮血がほとぼしるなかで、乃木はただちに絶命した。この間のいずれかの時点で、静子は短刀を抜いて心臓の上を数回突いた末に、苦悶しながら死んだ。」——加藤周一、M.ライシュ、R.J.リフトン(矢島<sup>みどり</sup>翠 訳)『日本人の死生観 上(全2冊)』(岩波新書、1977年)、pp. 40-41.

ジェファーズの注釈にあるような、<歌舞伎の演目やゴガティの創作>(765—766)という可能性は薄いと思われる。能や歌舞伎の有名作品に「オノギ」に近い演目は見当たらず、日本語としても「小野木笠」(足軽がかぶる鉄製の笠)、「オオノリ」(歌舞伎の発声法の一つ)がそれらしい音の単語であるにすぎないからである。この点を注釈者に確認を取りたかったのであるが、2005年6月1日、ジェファーズ氏は鬼籍に入られた。享年84歳。

37) 柳沼重剛(編)『ギリシア・ローマ名言集』(岩波文庫、2003/04年)、p.33.

38) 『世界大百科事典 3』(平凡社、1988年)の村上陽一郎の項目執筆によれば、「エーテル ether／元来はギリシアの自然学における概念。月より下の世界を構成する原質としての土、水、空気、火に対して、天体の世界を構成する原質が<アイテルaither>と呼ばれた。つまり、真空を認めないギリシア的自然観にあっては、天体の世界にはアイテル(エーテル)が充満していると考えられた。こうした着想は、コペルニクス、ガリレイ、ケプラーら近代初期の自然学者にまで受け継がれている。デモクリトスに発する原子論の系譜のみが、このエーテルの存在を否定していた。／エーテルが、形而上学的な概念から変化して、物理学的な実体を与えられたのは、ケプラーに始まる近代光学においてであった。とくにホイヘンスが<光の波動説>を説くにいたって、波動を支える媒質としてのエーテルという概念が浮かび上がる。例えばホイヘンスの波動説に対してまっこうから反対して<光の粒子説>を唱えたとされるニュートンでさえ、屈折現象に関しては、エーテルに頼っている。他方、ガリレイ以降、運動の相対性は当然のこととして受け入れられつつも、なお、ニュートンの絶対空間の提案にも見られるように、力学において、すべての運動を定義するための<絶対静止系>を、宇宙空間そのものの上に重ねて理解しようとする傾向は根強く存在し、光波動の媒体として実体化されたエーテル系(光エーテル系と呼ばれる)を、絶対静止空間とみなす暗黙の了解が生まれた。T.ヤングやフレネルによる光の波動説の再確認(18世紀末から19世紀初頭)によって、この了解は公的なものとなったと言ってよい。／19世紀末近く、地球が光エーテル系に対してもつはずの速度の実際的測定を目指した<マイケルソン＝モーリーの実験>は、意外にもまったく期待された結果を示さず、結果的には、光エーテル系の存在そのものの疑問ともなったが、H.A.ローレンツ、G.F.フィッツジェラルドらの数学的な提案を経て、アインシュタインの特殊相対性理論の提唱(1905)によって、この問題の解決は得られた。一方、19世紀後半、電磁現象の統一的解釈として提案されたJ.C.マクスウェルの電磁方程式は、新たな空間像としての<場>の概念の数学的な確立を告げるものであり、量子力学も今日その延長上に展開され、素粒子もまた、そうした空間(場)としての定義を受けるに及んでいる。これは古典的エーテル概念の新たな実体化とも見ることができる。」(下線は引用者)

39) アイルランドのジャーナリストで英国の保守党の政治家。編集長(*Financial News*)や雑誌営業局長(*Economist*)を務めた後、1929年に国会議員になり、情報相(1941-45)や海軍大臣(1945)を歴任した。

40) エイシャの台詞の一部。「かれは人間に言葉を与えた、言葉は思想を創造しました、それは宇宙を計るものです。」——シェリー(石川重俊 訳)『縛を解かれたプロミーシュース』(岩波文庫、1957年)、p.87. 同じ訳者の改版では、アジアの台詞として「人間に言葉を与え、言葉は思想を創った、宇宙を量る言葉を、」——『鎖を解かれたプロメテウス』(岩波文庫、2003年)、p.146.

41) 「美しいものからは多くの子孫が生まれ育ってほしい、そうすれば美しいバラはいつまでも死に絶えはし

- ない。」—小田島雄志 (訳) 『シェイクスピアのソネット』 (文藝春秋, 1994年), n.d.
- 42) 近藤孝太郎 (訳) 『グレゴリイ夫人戯曲全集』 (新潮社, 1924年)の訳者による解説では, 「救民院」(work-house)は「愛蘭土の共済組合で建ててゐる救民院」(p.231)とのことであるが, 果たしてそうであろうか? (注26) を参照。
- 43) Ann Saddlemyer (ed.), *The Comedies of Lady Gregory: Collected Plays 1* (Gerrards Cross: Colin Smythe, 1971)の巻末 Appendix IIIに副題 ‘A Sinn Fein Allegory’ を添えて収載。

## テキスト

テキストはA. Norman Jeffares(ed.), *The Poems & Plays of Oliver St John Gogarty* (Gerrards Cross, Buckinghamshire: Colin Smythe, 2001) を使用し, 原文または拙訳による引用の末尾に原著の頁数を付した。

## 参考文献

○ゴガティの伝記・著作に関する研究書

- A. Norman Jeffares, *The Circus Animals: Essays on W. B. Yeats* (London and Basingstoke: Macmillan and Co., 1970)
- James F. Carens, *Surpassing Wit: Oliver St John Gogarty, his Poetry and his Prose* (New York: Columbia University Press, 1979)
- Ulick O'Connor, *Oliver St John Gogarty: A Poet and his Times* (London: Jonathan Cape, 1964)
- J. B. Lyons, *Oliver St. John Gogarty: the Man of Many Talents* (Dublin: The Blackwater Press, 1980)
- J. B. Lyons, *Oliver St. John Gogarty* (London: Associated University Presses, 1976)
- James F. Carens, ‘Oliver St. John Gogarty’ in *Dictionary of Literary Biography Vol. 19: British Poets, 1880-1914* (Gale Research Company, 1983), pp. 179-186.
- James Carens, ‘Oliver St. John Gogarty’ in *Dictionary of Literary Biography Vol. 15: British Novelists, 1930-1959 Part 1: A-L* (Gale Research Company, 1983), pp. 113-118.

○アビー劇場関連

- Robert Welch, *The Abbey Theatre 1899-1999: Form and Pressure* (New York: Oxford University Press, 1999)
- Peter Kavanagh, *The Story of the Abbey Theatre* (Orono, ME: National Poetry Foundation, University of Maine at Orono, 1984)
- Mary Trotter, *Ireland's National Theatres: Political Performance and the Origins of the Irish Dramatic Movement* (New York: Syracuse University Press, 2001)
- Seam McCann (ed.), *The Story of the Abbey Theatre* (London: Four Square Book, 1967)
- Gerard Fay, *The Abbey Theatre: Cradle of Genius* (London: Hollis & Carter, 1958)
- Robert Hogan and Michael J. O'Neill, *Joseph Holloway's Abbey Theatre: A Selection from his Unpublished Journal Impressions of a Dublin Playgoer* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1967)
- 杉山寿美子『アベイ・シアター 1904-2004——アイルランド演劇運動』(研究社, 2004年)

(残念ながら、劇作家としてのゴガティや彼の5戯曲についての言及は全くない。)

○アイルランド文学・伝記辞典

Robert Welch (ed.), *The Oxford Companion to Irish Literature* (Oxford: Clarendon Press, 1996)

Henry Boylan, *A Dictionary of Irish Biography, Third Edition* (Dublin: Gill & Macmillan, 1998)

○その他

ジェイムズ・ジョイス (丸谷才一, 永川玲二, 高松雄一 訳) 『ユリシーズ I』 (集英社, 1996年)

『イエイツ戯曲集』 (山口書店, 1980年)